アートが生まれる場所
アートが紡ぐ時間 2

九州大学ソーシャルアートラボ（SAL）
平成28年度活動報告書

ART AND PLACE,
ART AND TIME 2

ごあいさつ

平成27年度に大学院芸術工学研究院に設置されたソーシャルアートラボ（SAL）は、社会の課題にコミットし、人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践を「ソーシャルアート」と捉え、その研究・教育・実践・提言を通じて、新しい生の価値を提示していくことを目的としています。

SALでは、平成27年度から、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受けて、アートの場をデザインするマネジメントを体系的に習得するための講座を開講しています。「新しい交流の場を切りひらく創造的なアート実践を企画運営できる人材の育成事業－九州沖縄地域のアートマネジメント人材育成ネットワークの構築」と題するこの事業は、地域のネットワークを創造的に活用しながら、地域の課題と向き合い、伝統文化や自然資源をいかしたアートプロジェクトを企画運営できる人材育成の体系的プログラムを考案実施することを目指しています。

この報告書は、SALの平成28年度の活動を記録したものです。Part 1ではアートマネジメント人材育成プログラム、Part 2ではSALがプロデュースし、『地域づくりとアート実践プログラム』の受講生や地域の方たちとともにつくり上げたアートプロジェクトFUKUOKA × YAME REMIX、そしてPart 3ではネットワーク構築のためのミーティングとラジオ番組について報告いたします。本事業への助成を賜りました文化庁、共催団体としてご支援いただいた公益財団法人福岡市文化芸術振興財団、そして本事業にご協力いただいたみなさまに、この場を借りて御礼申し上げます。

平成29年3月
九州大学大学院芸術工学研究院長
安河内 朗

目　次

プロローグ 2

はじめに：地域とアートの編集……2
SALの1年……2

Part 1　人材育成プログラム 5

Section 1　基礎コース……6
第1回　地域をいかす編集……7
第2回　地域をひらく編集……10
ワークショップ……13
基礎コース総括……14
Section 2　実践コース……15
①オリエンテーション……15
②フィールドワーク……16
③プロジェクト・ミーティング……16
④アートバスツアーの企画運営……17
⑤アートウィークの企画運営……18
実践コース総括……20

Part 2　アートプロジェクト　FUKUOKA × YAME REMIX 21

Section 1　アートバスツアー「里山を編む～天神・奥八女バスの旅～」…23
Section 2　アートウィーク「八女の大名茶会」……30

Part 3　ネットワークづくり 39

Section 1　ソーシャルアートカフェ……40
Section 2　SAL × LOVE FM 共同制作ラジオコーナー……42

エピローグ 46

ソーシャルアート・フォーラム「アートの場をデザインする」……46
今年度のアートマネジメント人材育成ネットワークの広がり……47
この1年を振り返って……48

〈コラム1〉デザインとアート……14
〈コラム2〉アート・地域・発酵……20
〈コラム3〉アートバスツアーの可能性、それは新鮮な文脈との出会いか……29
〈コラム4〉企画におけるコンセプトと編集的思考……38
〈コラム5〉地域をひらくアートプロジェクト……45

prologue

プロローグ

はじめに：地域とアートの編集

中村 美亜（SAL副ラボ長）

2016年には『地域アート　美学／制度／日本』（堀之内出版）という本が出版され、日本のあちこちで「アートは地域の力になる」、「いや、アートは地域のためにあるのではない」と喧々諤々の議論が巻き起こりました。まちのなかに脈絡なく置かれたアートが、まちの活性化に貢献しているかと問われれば、そのようには思われませんし、地域の人と一緒に表現活動したものが、どれもアートだと言われれば、それは違う気がします。その一方で、地域と協働する創造的なアート、地域に活力を与えるアートは確実に存在しているようにも思われます。

地域と深く関わるアートプロジェクトが活発になってきた現在、どうすれば地域とアートが幸せな関係を築くことができるかを議論することは重要でしょう。ところが、実際には、論者によって「アート」や「地域」の意味がまちまちで、建設的な議論にはなっていません。

アートとは何か？ これまでにも多くの哲学者や歴史家がアートの定義を試みてきましたが、万人が納得できる答えは見つかっていません。何がアートなのかを端的に定義するのは容易ではないのです。しかし、アートが社会でどんな役割を担っているかと問われるなら、ハードルは少し下がります。神野真吾さん（千葉大学准教授・芸術学）は、「感性に基づき、いまだ価値の定まらない何ものかを生み出し、その価値を未来に向けて問うものだ」と定義しています（『山梨日日新聞』2016年12月15日）。私は、もう少し抽象的に「世界の見え方や関係性を変える仕掛け」と言っています。重要なのは、これまで顕在化していなかった価値に何かの形を与えることで、私たちの認識や存在の仕方を揺さぶるという点です。

ただし、アートは合目的なものではありません。芸術社会学では、アートを「アフォーダンス」（可能性を与えるもの）と捉えます。たとえば、駅前にある大きな裸体像は、有名彫刻家による芸術作品だとしても、彫刻に興味のない人には待ち合わせ場所の目印でしかないかもしれません。裸体像に憧れを抱く人がいる一方で、嫌悪感を抱く人もいるでしょう。また、日差しの強い日には、日よけとして役立つこともあるかもしれません。アートがどう解釈され活用されるかは、それが置かれた文脈や、それを活用する人によって変化します。作品の意味は、それを取り巻くコンテクストと不可分なのです。

とはいえ、裸体像は、地図や時計と同じ役割を担うことはできませんし、電車やバスの代わりになるわけでもありません。アートは解釈次第で何にでも使えるというわけではないのです。つまり、アートは解釈や活用の範囲（＝可能性）を示唆する器（うつわ）のようなものなのです。

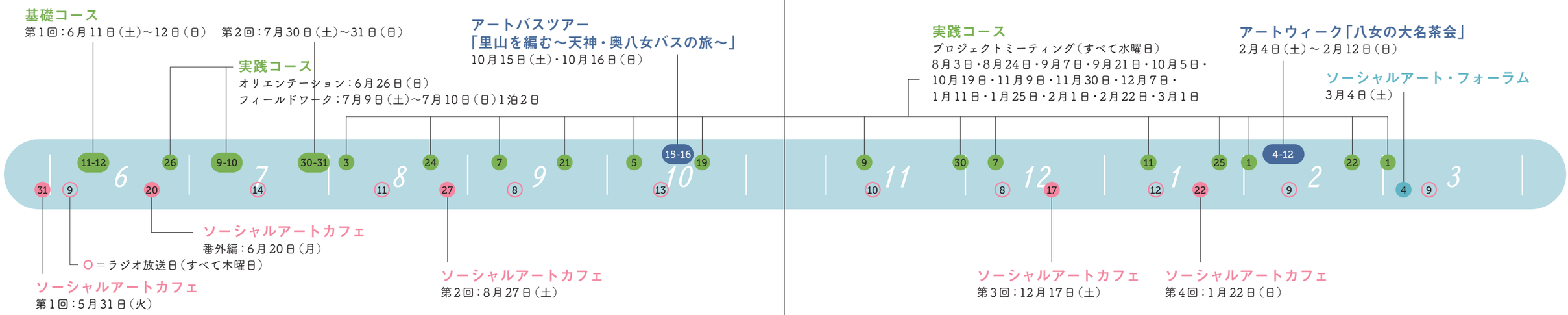
実際、アートの意味は、アート単体（以下「コンテンツ」）によってもたらされるのではなく、作品の置かれる歴史的・地理的・社会的コンテクスト（以下「コンテクスト」）と、受け手の知覚に作用する意識的・無意識的な記憶（以下「メモリーボックス」）の掛け合わせによって決まります。式を使って書くと、次のようになります。

アートの意味＝コンテンツ×コンテクスト×メモリーボックス

このように、アートがどのような意味をもつのかは、それがどんなコンテクストに置かれるのか、どんな経験をしている受け手に受容されるかによって大きく異なります。とくに、これまでアートにあまり親しんでこなかった人ほど、アートの意味はコンテンツやメモリーボックスに大きく左右されます。

そこで大切になってくるのが、「編集」という視点です。

SALの1年（年間スケジュール）



prologue
プロローグ

編集には、リサーチ（情報収集・分析）、マネジメント（整理・統合）、プロデュース（制作・表現）といった側面があります。これらがうまく組み合わさった時、アートは社会において力を発揮すると考えられます。

アートプロジェクトを「編集」という視点から捉えなおすと、地域のリソースや文脈を知り、そこに生きる人たちの記憶に触れ、それらを整理しながら新しい形に統合していくというプロセスが見えてきます。もっともわかりやすい「編集」の例は、地域のコンテクストをいかした作品を制作することでしょう。たとえば、牛島光太郎の《届かなかった光の範囲》（28ページ）は、地域の人たちの思い出のつまった「不用品」（モノ）を集め、里山の廃校になった小学校の体育館にモビールにして吊るしました。真っ暗な体育館のなかで、時折光に照らされるたくさんのモノを見ていると、里山の生活や自然との共存、都市との関係や環境問題にも思いが巡っていきます。地元の人たちは吊るされたモノを見ながら、昔の記憶を蘇らせていました。

近年のアートプロジェクトでは、作品の制作プロセスを通じて、地域の人間関係や人々の地域に対する意識に変化を与える「編集」というのもあります。たとえば、ジェームズ・ジャックの《八つの土のレイヤー》（27ページ）は、豪雨災害で閉鎖された川べりのキャンプ場の小屋を、地域の人たちと協働しながらアート作品として再生させました。訪れた都会の人たちも、地元の人たちも、廃墟になっていたキャンプ場のもつ場の豊かさや未来への潜在価値に気づくと同時に、地域への愛着を深めました。うまく編集されたアートプロジェクトは、私たちの認識を変えることができるのです。

さらに、アートプロジェクトは認識だけでなく、関係性の変容も促します。藤枝守の《松楠居の茶三昧》は、八女茶をテーマに、ふだんあまり顧みられることのない「人と茶の関わり」にスポットをあてました（31〜33ページ）。茶の栽培や淹れ方などに関する徹底したリサーチと、それを通じて出会った人々や素材の絶妙なマネジメント、それらを再統合した創造的な作品の制作やパフォーマンスのプロデュースを通じて、人と人の出会いを誘う茶の原初的なあり方に迫る「茶会」をつくり出しました。茶会は参加者の茶に対する認識だけではなく、八女茶との関わり方までをも一新させました。

「アート」と一口に言っても、それが作品展示なのか、それとも作品を生み出すプロセスも含めるのかによって、その意味するところは大きく異なります。また、地域とあまり関係のない芸術家によってつくられたのか、地域のさまざまなステークホルダーとアーティストとの協働作業を通じてつくられたのかによっても、もたらされる効果は変わってきます。さらに「地域」の変化と言っても、地域への誇りが高まったり、ブランディング効果が生まれるというように認知のされ方が変わるのか、それとも、経済が活性化したり、交流人口が増えるというように、地域のあり方そのものが変わるかなど、いろいろです。

地域にアートの場をデザインする過程に「編集」という視点を取り入れ、リサーチ、マネジメント、プロデュースを意識的に実行することで、アートと地域の幸せな関係を築いていくことができるようになるのではないでしょうか。

Part 1 人材育成プログラム
Section 1 基礎コース
Section 2 実践コース

Part 2 アートプロジェクト FUKUOKA × YAME REMIX
Section 1 アートバスツアー「里山を編む〜天神・奥八女バスの旅〜」
Section 2 アートウィーク「八女の大名茶会」

Part 3 ネットワークづくり
Section 1 ソーシャルアートカフェ
Section 2 SAL × LOVE FM 共同制作ラジオコーナー

photo: A.T.

SALでは、「新しい交流の場を切りひらく」というテーマで、アートに関わるマネジメント人材育成のための新しいプログラムを考案・実施しています。平成28年度は、「地域の編集」をテーマとし、人口減少などの社会的課題を抱えつつも、自然・文化資源が豊富で、芸能や祭が盛んな九州沖縄地域の特性を踏まえた、地域協働型のアートマネジメントの可能性を模索しました。

平成28年度のコースおよびプログラム

基礎コース

地域の価値を可視化し、ネットワークを創造的に活用しながら発信する「編集力」を高めるためのプログラムを実施しました。ここでは「編集」という言葉を、リサーチ＋プロデュース＋マネジメントの総合的なスキルとして定義しました。

実践コース

地域にアートの場を切りひらき、運営していく実践スキルを総合的に修得するためのプログラムを実施しました。アートプロジェクト「FUKUOKA × YAME REMIX」の企画運営に参画し、企画立案、コミュニケーション、手続き、コンテンツ展開、広報、評価を実践的に学びました。

Section 1

基礎コース

「地域づくりとアート：『編集』の視点から再考する」と題した2日連続講座を2回実施しました。各回1名の講師による概論、3名の講師からのケーススタディ、クロストークやワークショップを通じて、新しいアートの場をデザインするのに必要な「編集力」や情報発信の方法を検討しました。

第1回：地域をいかす編集
6月11日（土）13:00-18:30
12日（日）10:00-16:30
講師：紫牟田 伸子　編集家
上田 假奈代　NPO法人こえとこころとことばの部屋代表
松岡 勇樹　株式会社アキ工作社代表取締役
山内 泰　NPO法人ドネルモ代表理事

第2回：地域をひらく編集
7月30日（土）13:00-18:30
31日（日）10:00-16:30
講師：平井 康之　九州大学大学院芸術工学研究院教授・インクルーシブデザイン
楠本 智郎　つなぎ美術館学芸員
白水 高広　株式会社うなぎの寝床代表取締役
長野 隆人　いわき芸術文化交流館アリオス広報グループチーフ

会場：九州大学大橋キャンパス7号館ワークショップルーム
ナビゲーター：中村 美亜　SAL副ラボ長
長津 結一郎　SALコアメンバー
受講生：61名〈第1回30名、第2回31名〉
（公共ホール施設職員、自治体職員、地域づくり専門職員、アーティスト、アートコーディネーター、アートマネジメント専攻学生など）

第1回　地域をいかす編集

第1回の講座のテーマは「地域をいかす編集」。雑誌の編集者を経て、「ものごとの編集」を軸に市民と協働するプロジェクトや地域活性のプロジェクトに携わる紫牟田伸子さんから、編集とはどのような行為を指すのか、その行為の背後にはどのような思想があるのかを聞きました。

編集という創造

紫牟田 伸子

編集は可視化して価値化すること

「編集する」というと、まとめることだと思うでしょう。そうじゃないんです。まとめることではなく、実は価値を見つけ、それを提示することなんです。その価値は、自分の手のなかでつくるだけではなくて、むしろ人のなかにあるという考え方、あるいは自分の外にあるという考え方ですね。自分の外にあるものは、もうすでに素材としてある。たとえば地域を考えてみると、すごくたくさんの素材があるんですよね。事実があり、資源がある。それらをどういう風に料理しようか。それは、私たちの見方一つで変わってくるわけですね。だから、地域を見る時に、いろんな見方をすべきだと思うんです。特に最近、リノベーションが流行っているのも非常に編集的だと思うんですね。つまり、今ある資源を新しい何かと組み合わせて、新たにしていくわけです。

今は、さまざまな意味で、まったく新しいものを生みづらくなっている。もちろん新しい技術などは生まれていますよ。でも、ポストモダンといわれるこの時代のなかで、私たちは、過去のものも現在のものも等価に考えながら、それもすべて資料あるいは素材として、自由に組み合わせる自由を持っているんです。だからこの二次的創造としての編集作業というのは、無限の可能性があるわけです。だったら面白くしようよというのが私の考え方です。

編集と好奇心

編集する時の基本は、好奇心と違和感だと思っています。本当に面白いことをやっている人は絶対好奇心を持っている。それで、その好奇心に対して、編集が上手い人も一緒にするとか、自分は編集をするけれどもプレイヤーじゃないからプレイヤーが一緒にいるとか、そうやって仲間をつくっていったりすると思うんです。他方で、「これちょっと違うな」とか、「あれ、この言葉ってちょっと違うんじゃないかな」とかいう些細な違和感が根強く自分のなかに残ってくると、それが次のテーマになっていくみたいなところはありますね。

編集者＝言いたいことの増幅の補助をする人

これまでのデザインにおけるプロデュースは、デザイナーがデザインをフィニッシュするところまでのマネジメントでした。でも私は、デザインっていうのは何かをはじめるために何かを投入する、そのものをつくる、それを計画することだと思っています。アートもそういう役割があるわけで、実ははじまりをつくるもの。それをつくっている人が、これで自分の仕事が終わりだと思ってはいけないんです。

紫牟田伸子　（編集家／プロジェクトエディター／デザインプロデューサー）
美術出版社、日本デザインセンターを経て、2011年に独立。「ものごとの編集」を軸に企業や社会・地域に適切に作用するデザインを目指し、地域や企業の商品開発、ブランディング、コミュニケーション戦略などに携わる。

- 紫牟田伸子（共同監修）『シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする』宣伝会議、2008年
- 紫牟田伸子（共同監修）『シビックプライド2：都市と市民のかかわりをデザインする』宣伝会議、2015年
- 紫牟田伸子『編集学：つなげる思考・発見の技法』幻冬舎、2014年
- 紫牟田伸子（編）『日本のシビックエコノミー：私たちが小さな経済を生み出す方法』フィルムアート社、2016年

紫牟田さんの講義に続いて、地域と向き合うプロジェクトを手掛ける3名のゲストから事例紹介がありました。まずは詩人の上田假奈代さん。上田さんは、大阪・釜ヶ崎のカフェ&ゲストハウスで、人と人との間をじっと見つめ、そこから見えてくるもの、聞こえてくるものに形を与えることの意味について話しました。

表現は人と人の間にあるもの

上田 假奈代

人の話を「聴く」ということは、表現を大切にすることだと思っています。話を聴くのは面白くて、私の見知らぬその人の横顔が見えてくるんですよね。家族や身近な人であったらなおのことです。それからまったく知らない人の場合も結構面白くて、関係がグッとくるんですよね。同じ言葉でも、その人が発した言葉を凝縮し、聴いたことを詩にするワークショップを行います。言葉がグッと分厚くなるんですよね。人生の面白さ、深みにそっと触れます。

言葉って難しいですよね。いつも私たちは何か選択するときに、自分である言葉を見つけて限界をつくったり、あるいはその限界を乗り越える言葉を見つけたら乗り越えられるんですよね。そう考えると、言葉を人生の味方にしておいた方がいいかもしれないなと思う。でもその片方では、言えなかったあの言葉の大切さ、みたいなものを失いたくないとも思うんです。それを行ったりきたりですよね。

私が小さい時に母親が「人の人生っていうのは、縄みたいなものなんだ」って言ったんです。編むと内側になって外に出ない面があったり、外に出る面が交互にありますよね。いいことも悪いことも長くつづくわけではない、ということでしょう。現れないもの、見えないもの、言葉にできないものっていうのもやっぱり編まれていくんじゃないのかなっていう風に今思います。

上田假奈代　（NPO法人こえとことばとこころの部屋〈ココルーム〉代表）
1969年生まれ。2001年「詩業家宣言」を行い全国で活動。2003年ココルームをたちあげ「表現と自律と仕事と社会」をテーマに社会と表現の関わりをさぐる。2008年から西成区（通称・釜ヶ崎）で喫茶店のふりをし、2016年「ゲストハウスとカフェと庭」を開く。大阪市立大学都市研究プラザ研究員。2014年度 文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

🌐NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
www.cocoroom.org

🕮上田假奈代『釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココルーム』フィルムアート社、2016年

続いて、大分県国東（くにさき）市のアキ工作社で代表取締役を務める松岡勇樹さんが、地域の人とともに創造した「時祭（ときのまつり）」を紹介しました。

祭りをつくる

松岡 勇樹

私はコミュニティ自体の再構築を目的に、「時祭（ときのまつり）」をつくりました。最初にやったのは、地域の人たちへのインタビュー。できるだけ多くのいろいろな人たち、主に地元のお年寄りに昔の話を聴くところから始めました。2〜30人くらい、地域の高齢者の方から順番に聴いていきました。みんなやっぱり話したいんですね。子どもたちは国東から出て行って、夫婦二人で暮らしていたり、独居老人も多いです。話す相手がいないなかで、言い伝えがゴロゴロ出てくる。題材というか、考えるヒントみたいなのがたくさん出てくるんです。

そういうのを収集していると、三浦梅園という哲学者が、江戸時代に国東に住んでいたことがわかりました。彼の思想は独特で、条理学と呼ばれますけど、日本人には珍しく、ほかの人のアイディアとか文献をあたらずに、等身大の自然と接しながら一から組み立てていって、宇宙の条理を説明しつくそうという体系的な学問でした。その思想に「一即一一、一一即一」という有名なフレーズ（簡単に言うと、一つの物に二つの面があって、しかも裏表でもないという関係性）がありますが、それを祭り全体で表現することにしました。

時祭はアーティストが関与しながらつくっていきましたが、中心にあるのは人の思いや思考で、それが必ず核になるので、それさえあればどこででも発生するだろうし、できるものは場所によってまったく違ったものになりますよね。そして私は、ステークホルダーを限りなく増やしていくというのがお祭りの大きな意義だと考えています。祭り自体は本当に一瞬で終わってしまいますが、そのためにいろんな準備をして、できるだけお祭りに関わる人数を増やしていくわけです。祭りのそもそもの目的は、地域共同体の強度をつくっていきたいというところにあるので、祭りと呼んでも呼ばなくても、そういう関わり方はいたるところでできると思いますね。

松岡勇樹　（株式会社アキ工作社代表取締役）
1998年、故郷である国東市安岐町にアキ工作社を創業。2001年「段ボール製組立て式マネキン」でグッドデザイン賞受賞。2004年第2回大分県ビジネスプラングランプリで最優秀賞受賞。2009年から、廃校になった旧西武蔵小学校を国東市から借り受け、事業の拠点とする。日本文理大学建築学科客員教授。

🌐株式会社アキ工作社　http://www.wtv.co.jp/

続いて、福岡のNPO法人ドネルモ代表理事の山内泰さんが、受け身と思われている人々が小さな一歩を踏み出すための仕掛けについて話しました。

これからの普通をつくるために

山内 泰

僕はもともと美学の研究をしていたのですが、そこでは作品をどうつくるかというアーティスト側の議論と同時に、アーティストがつくったものをどういう風に人々が受け取り、支えていくかという議論もあったんです。このような関心から、僕は、どういう風にいわゆる一般的に受け身だとされている人たちが、自分たちがいいと思うものをつくっていく、価値をつくっていく営みに関わることができるのかっていう観点に気づいたんですね。それで、地域の人たちが関わり合い、主体的にやりたいことを形にしていけるような場づくりを行っています。

たとえば超高齢化社会に関していえば、これまでの普通がもうだめだったら、これからの普通をつくるしかないと思っているんです。じゃあどうするかという時に、僕たちは、誰かと関わることで形になるというところをポイントにしているんですね。というのも、これからの普通をつくっていく上では、自分が意識的かつ無意識的に持っているこれまでの普通を相対化したり、そこから抜け出していったりする必要があります。でも一人で考えていてもそれは難しい。だから手っ取り早いのは、自分とはまったく違った「普通」を持っている人とか、自分が「普通」だと思っていなかった人たちと一緒に何かをやっていくところにあると思うわけです。

地域の担い手と言う時に念頭に置かれているのは、自分で何でも企画ができてマネジメントもできて、強く高い志をもつリーダーみたいな人だと思うんですよね。けれども僕たちは、自分一人では何もやろうと思わないけれども、「この人たちと一緒だったらやってみたいな」とか、「みんなと話しているうちにこんなことやりたくなったな」とか、「話しているうちに、こういうこと自分たちでもできるかもしれないな」って思うような関わり方が生じる場や関係性をつくっていきたいと思っているわけです。

今のプロジェクトも成果は出ているんですけれど、本当は僕たちが送り出した人たちにどうなってほしいか、生まれてくるプロジェクトにどうなってほしいかというと、たとえば今ここにいない人たちのことについて考えはじめるとか、自分たち以外の人たちについて考えはじめるとか、そういうことなんです。この場に出て来られないような独居老人の方とか、こういう困った人がいるんじゃないかっという想像力をどう持つかとか、あるいは昔ここにどんな人が住んでいたんだろうとか、あるいは将来どんな人が住みはじめるのかな、みたいなところまで意識を持った形でプロジェクトをつくっていってくれればなって。

山内泰　（NPO法人ドネルモ代表理事）
1977年生まれ。芸術工学博士（九州大学）。芸術文化を受け手の側から捉え直す理論研究の傍らドネルモを立上げる。紆余曲折を経て、ドネルモは「超高齢社会に向けて、1人ひとりの可能性が、誰かと関わることでかたちになってゆく社会をつくる」NPO法人へ。福岡市との共働事業「地域デザインの学校」など、学び合いの場づくりや支えあいのしくみづくりの事業に取組む。その他、株式会社ふくしごと取締役、大学講師等。

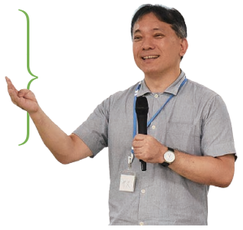
🌐NPO法人ドネルモ　http://donnerlemot.com/

第2回　地域をひらく編集

第2回の講座のテーマは「地域をひらく編集」。インクルーシブデザインを専門に研究する平井康之先生が、主観的なアイディアを共感に変えるプロセスのデザインについて話しました。

多様な人との協働

平井 康之



主観からの出発

なぜ私が「インクルーシブデザイン」というのかというと、最初から多様な人々とともに考える方が、より良いものができると思っているからです。そういう場では、ある人の想いからスタートしている。「こんなものがあったらいいね」をつくる。それって、最初に仮説のトスを上げる状態なんですよね。誰かがいいトスを上げないと、その後つながっていかないんです。そのためには、デザイナーも参加者も一緒にクリエイティブに、いいトスを上げる。その上がったトスを、「これいいね」、「これいいね」とみんなでつなげていく。それがワークショップ全体で共有されて「いいね！！」となって次のプロトタイプができていく。ワークショップから外に出ていって、たとえば企業から認められるとか、社会で採用されるとか。そういう風にどんどん一人の主観から間主観へと持っていく必要性があると思っています。

共感をつくりだすプロセス

データからの予測も大事ですが、共感ということがやはりすごく大事です。データとしていろいろ見ていきますが、同時に、日常の自分ごととして捉える視点が重要なんです。デザインの場合は、機能性はもちろん、マイナスをゼロにしたり、ゼロをプラスにしたり、価値の視点からプロセスをどう考えていくかということです。データだけだと、いつまでたってもデータからの予測しかできないので、どうやって、自分ごとで捉えるかというところが共感のプロセスであり、デザインの面白いところですよね。

「チャンピオン」をみつける

役職とかなくても、どんどん自分から進めていく人を「チャンピオン」といいます。そういう人がチームにいるかによって会話も弾むし、どんどん変わっていくはずです。グループなので、ある一人の人が優秀というよりは、みんなの意識が高い方がいい。今回のテーマだったら、地域のなかで誰がチャンピオンで、一緒に走ってくれるかみたいな。そういう人がいないと持続しないですよね。その人をどう見つけるかがうまく行くポイントです。

アイディアは、ブルースカイで発想する

アイディアを出す時、アクセルを踏みながらブレーキを踏むということがよく起こります。でも大事なのは「こんなものがあったらいいな」を自由に考えて、とにかくやってみること。最後は予算とか時間を考えないといけないです。ただし、最初から収束を考えてしまうと、狭い範囲のものしかできないんですよね。誰が思いつくかは分からないから、そういう意味で、アイディアを思いつきやすいようなコミュニティ、あるいは環境をつくることが重要です。

平井康之　（九州大学大学院芸術工学研究院デザインストラテジー部門教授）
専門は生活空間デザイン、インクルーシブデザイン、デザイン思考。ソーシャルデザインの視点からデザイン研究を行っている。2010年より国立民族学博物館客員教員。

- 平井康之（共編）『インクルーシブデザイン・ハンドブック』たんぽぽの家、2006年
- 平井康之（共編）『インクルーシブデザイン：社会の課題を解決するデザイン』学芸出版社、2014年

続いて、3名の講師から、地域の人々と協働するためのノウハウや、地域内のものを地域外の人に伝えるための工夫などを聞きました。最初に、熊本県津奈木町（つなぎまち）の町営美術館「つなぎ美術館」の学芸員の楠本智郎さんが、地域の人々とアートプロジェクトを行う際に大切なことを語りました。

アートでなければつながれない人がいる

楠本 智郎

住民参画型というのは本当に、三歩進んで二歩下がる、そしてまた三歩進んで二歩下がる、それの繰り返しです。住民の意向をどんどん反映させていくので、非常に可変的なプロジェクトなんです。先に着地点を決めてしまうと全然面白くないんですよね。だから細かいところは決めずに、いつも流れに任せるようにしています。ただし、出会いと出来事が、定期的に津奈木町に訪れるような計画だけはやっています。

今、つなぎ美術館では、住民参画型アートプロジェクトのほかに、アーティストの浅井裕介さんが関わる「つなぎの根っこ」、そしてアーティスト・イン・レジデンス、そのほかの活動を連携させながらやっています。それぞれのプロジェクトに異なる目的があります。外向けなのか内向けなのか、地域連携を強化するのか、作家の個性を重視するのか。これに対する意識をおろそかにすると、同じことをやってしまって、結局地域の活性化が効率的に行われないんです。

私は学芸員なんですけれども、実際は地域文化コーディネーターのような役割の方が強いかなと持っています。常に必要な情報というのを編集して地域のなかに持っていく、作家さんにも必要な情報を編集して持っていくと。そういう役割ですね。

津奈木町のアートプロジェクトで大事にしている要素は、芸術性と地域性、そして話題性です。芸術性がないとアートプロジェクトと言い切れないわけですよね。そして、地域の情報であるとか、素材っていうのが盛り込めるか。そうしないと地域の人たちが見に来てくれないんですよね。足を運んでもらうためにはやっぱり地域性。そしてあと話題性です。客観的な評価を得ることによって、みなさんのモチベーションを上げるということです。メディアとの協働も大事になってきます。メディアの方にとっても、番組は自分の作品なんですよね。良い作品をつくるために、お互いにWin-Winの関係で良い番組をつくっていくという視点で、協力していくということです。

娯楽性というのも最近、大事だなという風に思うようになりました。やっぱりみなさん、飲み会がないと長続きしないんですね。うちみたいな小さなところではこれが大事です。「終われば解ける結び目づくり」にもこだわっています。組織をガチガチに固めてしまうと、誰も恐ろしがって近づいてきません。ちょっと顔を出したが最後、絶対断れないんじゃないかと思って。なので、参加できる人ができる時にできる範囲でやると。こちらからは強制しないというのが、つなぎ美術館のやり方です。

楠本智郎　（つなぎ美術館学芸員）
1966年福岡市生まれ。鹿児島大学大学院人文科学研究科修士課程修了。タイ国立大学常勤講師等を経て2001年から現職。社会教育事業としてのアートプロジェクトを考案し2008年から実践している。近年は地域密着型アートプロジェクトの功罪を踏まえたうえで複数のプロジェクトを運営し、過疎地域におけるアートの可能性を探っている。つなぎ美術館唯一の学芸員。「赤崎水曜日郵便局」プロデューサー兼管理人。

- つなぎ美術館　http://www.town.tsunagi.lg.jp/Museum/
- 楠本智郎『赤崎水曜日郵便局』KADOKAWA/角川マガジンズ、2016年

次に、福岡県八女市の「うなぎの寝床」代表取締役の白水高広さんから、ものづくりの工程や技術の見える化を通して生産者と消費者の意識を埋める工夫について話を聞きました。

手仕事の価値を見せる

白水 高広

その土地にあるいいものが知られてないのはもったいないと思って、そういうものを紹介できる場所をつくろうと、今の事業をはじめました。良い物はもうたくさんあるし、物の機能という観点では「100均」でも普通に満たされる場合もありますよね。でも、物を見る時の視点は機能だけじゃなくてもいいと思っているんです。僕自身は、「あ、こうやってつくられているんだ」とか、「こういう人たちがこういう風につくっているんだ」とか、「こういう地域で採れてこういう素材でつくってるんだ」とか、そういうことが面白いと思ったんです。だから、僕のところでは、物単体というよりも、つくり手と話をすることに重きをおいています。

たとえば桶の生産者さんは、制作工程から考えると割に合わない、すごい安い値段を付けていたんですよね。それで卸しに堪えられないようになっていたので、「一緒に、このへんをこうしましょうか」って話をして、値段も改定したりしました。あくまでも物はコミュニケーションのツールだと思っているので、実際には、物を通してつくり手と一緒に問題点を見つけたりとか、値段を考えたりしているんです。そして消費者には、物の制作工程を公開することでコミュニケーションとったりしています。

情報を発信する時には、「どういう情報を見たら足を運ぶかな」と自分に置き換えて考えるのと、一般的に見てどう見えるかっていう引いた物の見方の間を行ったり来たりします。

たとえば、自分が感覚的にどう思うのかっていうのと、骨董屋さんが見たらどうなんだろうって、そういうものです。いろんな人の感情になってみて、シミュレーションしながら全体を構成しているっていうところがありますね。

白水高広　（株式会社うなぎの寝床代表取締役）
1985年佐賀県生まれ、大分大学工学部福祉環境工学科建築コース卒業。個人事業としてデザインの仕事をはじめる。後3年間、福岡県南部・筑後地域の商品開発やブランディングを行う「九州ちくご元気計画」の主任推進員として経験を積む。任期を終え2012年、大学からの友人である春口丞悟とともにうなぎの寝床を立ち上げる。販売だけではなく、調査研究も含めた、地域の人、文化、技術などを掘り起こしながら、さまざまな人々、会社、行政ともコミュニケーションをとり事業を推進。企画・デザイン・商品開発・撮影、調査研究など、幅広く活動を続ける。

🌐うなぎの寝床　http://unagino-nedoko.net/

🕮うなぎの寝床（編）『地域資源発掘シリーズ：佐賀・柳町』うなぎの寝床、2016年

福島県のいわき芸術文化交流館アリオス広報グループチーフの長野隆人さんから、今、地域に求められる文化施設の役割について聞きました。

地域をひらく／自分たちをひらいてもらう

長野 隆人

地域の人から愛される施設になるために、私たちは劇場・音楽堂の仕事と直接関係ないことでも何でもやっています。アリオスを媒介にして、新しいコミュニティとかつながりができていけばいいんじゃないかと思います。結局、そこの地域にいる人とかお店とか、そういったものがメディアそのもので、発信媒体としての魅力もあるんです。それから、まち全体とか、人の人生そのものがやっぱり図書館じゃないかって感じています。それらを、私たちスタッフは参照しながら、そこにある価値や魅力を読み込んで、意外な組み合わせを見せたりする。そうすることで、今までとどこか違った方向性の面白いこととか、新しい価値観が生まれてくるのが、編集行為なんじゃないかなと思っているんです。

地域をひらくって、結局、自分たちをひらいてもらうことに尽きるよなって思うんですよね。「いわきアリオスは舞台芸術の施設です」って自分たちで自分たちの定義をしてしまうと、それだけの施設で終わってしまいます。ですが、「あれできませんか？」「これできませんか？」という要望をちゃんと聴いた上で、それに対して応えていくと、結果として、自分たちの可能性も広がっていきます。これは賛否両論ありますけれどもね。そうやって、いじってもらうための隙間を、施設やプロジェクトは残しておかないといけないんじゃないかなと思っています。

僕らからするとアーティストって、地元で活躍しながら、ちゃんと生計立てながらやっている人です。そういった人たちの後押しをすることと、市民のアート心をどう引き出していくかっていうことをものすごく考えるわけです。その下支えというか、底上げをしておいた段階で、本物のアーティストとの出会いがあることによって、さらに大きなうねりが出ていく。この一人ひとりのアートプロジェクトを更新するような取り組みができていくと、まちのアート寄りの基礎体温が上がっていくんじゃないかなと思っています。

長野隆人　（いわき芸術文化交流館アリオス広報グループチーフ）
1976年、静岡県島田市生まれ。大学在学中からクラシック音楽の雑誌の編集に携わり、2003年に月刊「ぶらあぼ」副編集長、2005年からはバレエとダンスの情報誌「DANZA」創刊編集長を兼務した。いわきアリオスには開館1年前の2007年に着任。通常の広報業務のほか、市民との協働プロジェクトや高校・大学、地元団体との連携を通して公立文化施設の可能性を拡げる「施設広報」の確立に力を注いでいる。

🌐いわき芸術文化交流館アリオス　http://iwaki-alios.jp/

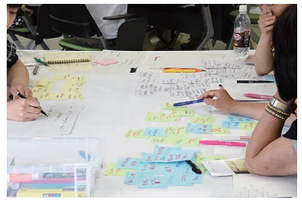
🕮いわき芸術文化交流館アリオス（共著）『文化からの復興：市民と震災といわきアリオスと』水曜社、2012年

ワークショップ

レクチャーに続いて、編集をテーマとしたワークショップを実施しました。

第1回講座「企画立案」

身近にある資源を思いつくままに書き出す。



情報を組み合わせて、面白くなりそうなアイディアをみつける。

新しいアイディアのプレゼンテーションと意見交換。

第2回講座「新聞づくり」

その場にいない人に、わかりやすく講座のエッセンスを伝える。

7つのグループそれぞれが、個性的な新聞を作成。

基礎コース参加者の声

地域の人の話を聞くこと、リサーチの重要性を再認識した。

各地域によって条件が違うので、その特性をしっかりおさえて取り組む必要があると感じた。

今まで、地域づくりのゴールはお金を生むことだというイメージしかなかったが、コミュニケーションのデザインや釜ヶ崎芸術大学のような場によって、地域に新たな価値が生まれることが分かった。

行政が定めた地域を超えた地域活動に興味が出てきた。

多様性を生むには、その土壌をつくる側がはっきりとした意志・目的を持つべきだという思いが強くなった。

意志をもった住民の集まる地域づくりにおいて、アートが重要な役割を果たすものであるというのは変わらずに考えていることであるが、定義づけの難しい「アート」という言葉に振り回されるのではなく、しっかりと本質を見つめることが大切だと感じた。

REVIEW

総　括

基礎コース

高坂 葉月（SAL事務局長）

「編集」をテーマとした基礎コースでは、8名の講師のレクチャーを聴いた。取り組みは多様で相手にしている人たちもさまざまだったが、講師に共通するのは、関わる地域の人の声あるいは声にならない声に耳を傾け、それを素材として新しい価値を生む方法や仕掛けを提案していることだった。地域にあるけれどまだ見えていないもの、気づかれていないものをどう価値化し、どう可視化したのかがケーススタディから具体的に見えてきた。以下では、講座を通してシェアされた情報やスキルのなかから、地域と協働するアートマネジメントで特に意識したいポイントを挙げる。

物事の見方

» 自分の好奇心と違和感を大切にする。
» 今の自分に見えていないもの、聴こえていないものを想像してみることが重要。
» 自分が考えていること、行っていることを俯瞰してみる姿勢が必要。

考えの共有

» さまざまな立場の人の気持ちを想像し、その都度、言葉や伝え方を柔軟に変えるスキルが大切。

参加の仕組みづくり

» 関わりたい時に関われる、抜けたい時に抜けられる緩めの組織づくりが必要。

広報

» 地域内から伝聞的に伝わる情報と、地域外からの評価の両方がバランスよく得られるような仕掛けが必要。
» メディアとWin-Winの関係を築くことが重要。

column 1

デザインとアート

中村 美亜（SAL副ラボ長）

デザインという言葉から一般にイメージされるのは、模様や図柄、あるいはレイアウトといった「意匠」だろう。美術大学でも、絵画や彫刻と並んでデザインがあるので、デザインは実用的な絵や物を創作するアートの一分野だと思われがちである。しかし、元来デザインはそういうものではなかった。

デザインが生まれた19世紀末から20世紀初めは、近代アートがその極限に達していた時期だった。作家の創造意志が何よりも重んじられ、アートはアートのために奉仕するものと捉えられていた。そんななかで、日常に目を向け、生活の質を高めるための創作活動をしようとはじまったのが、デザインである。デザインは、目的を達成するために物や仕組みを生み出すことを意味し、日本語の「設計」にあたる。コンセプトとしてみるなら、合目的なデザインと意志的な近代アートはまったく相容れないものだった。

ところが、それから100年が過ぎると、デザインとアートが重なり合うようになってくる。例えば「デザイン思考」や「インクルーシブ・デザイン」の分野では、単に顧客のニーズに応えるだけでなく、その先にあるものを形にして提案をすることがデザイナーに必要とされる。一方、地域の芸術祭や「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」では、アーティストに日常や社会と向き合うことが要求される。デザイナーとアーティストの役割が重なり合うようになってきたのだ。アートが、近代以前のアートのあり方に回帰してきたという言い方もできるかもしれない。

今回の基礎コースでは、敢えて「編集」というデザイン的なアプローチを採り入れることで、アートにこれまでとは違う観点から光をあててみようと試みた。アートそのものは、アーティストの意志を表現するものだとしても、社会の中にアートの場をプロデュースし、アートの活動をマネジメントするには、デザイン的な思考が有効である。コンセプトの違いは違いとして、現実に重なり合う部分は重なり合うものとして、両者の新しい関係を見出していくことが重要だろう。

Section 2

実践コース　［地域づくりとアート実践プログラム］アートプロジェクトFUKUOKA × YAME REMIXのプロデュース＆マネジメント

平成28年度、ソーシャルアートラボは、福岡市と八女市という2つの地域をつなぐアートプロジェクトを実施しました（詳細はPart2参照）。地域にアートの場をひらくこのプロジェクトへの参画を通して、地域協働型のアートマネジメントのスキルを身につける講座が、「地域づくりとアート実践プログラム」です。

①オリエンテーション　6月26日（日）10:00-17:00
場所：九州大学大橋サテライト「ルネット」

②フィールドワーク　7月9日（土）～10日（日）
場所：福岡県八女市黒木町笠原地区

③プロジェクトミーティング　7月後半～3月前半まで隔週
場所：九州大学大橋キャンパス3号館601教室

④アートバスツアーの企画運営　7月下旬～10月中旬
場所：福岡県八女市黒木町笠原地区、八女市本町

⑤アートウィークの企画運営　8月中旬～2月中旬
場所：福岡県八女市黒木町笠原地区、八女市矢部村、八女市星野村、八女市上陽町、八女市本町、福岡県福岡市中央区天神地区
受講生：21名（自治体文化財団職員、公共ホール職員、地域デザイナー、建築士、茶生産者、学生　ほか）

1 オリエンテーション
6月26日

実践コースの受講生全員を対象としたオリエンテーションとワークショップを実施しました。

- 朝廣和夫「里山保全と都市の暮らしとの関係」
- 小森耕太「地域の人たちとのコミュニケーション」
- ディスカッション「実践コースで学びたいこと」

2 フィールドワーク
7月9日～10日

1泊2日の合宿形式で、八女市黒木町笠原地区のフィールドワークを行いました。

- 地域の資源探し
- 村入りの儀（田んぼの草取り、らっきょう植え）
- アーティストの作品プラン発表
- ディスカッション
- 役割分担とスケジュール確認

3 プロジェクト・ミーティング
7月後半～3月前半まで隔週で実施

受講生は、プロジェクトの進捗状況を確認し、必要なタスクを整理しました。
メンター：長津結一郎、高坂葉月、猪股春香

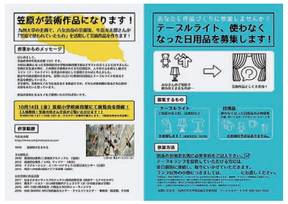
4 アートバスツアーの企画運営
7月下旬～10月中旬

制作補助

受講生は、作品制作に使用する素材を集めるためにチラシを作成しました。はじめは集まりが芳しくなくプランの実現が心配されましたが、回覧板のチラシを見た地域の一人の女性が作品のアイディアに興味を示し、近所からトラック2台ほどのモノを集めてくれました。

展示場所となった旧笠原小学校の体育館では、地域の方から借りたものを仕分けした。

体育館の天井からモノを吊るすための細工づくり。300本以上の針金をベンチで曲げ、形を整える。



受講生が制作したチラシ

展示場所の掃除。2012年の水害以来閉鎖されたこの場所には、4年分のほこりが積もっていた。

イベント実施

アートバスツアーの日、受講生はツアー客とともにバスで移動するチームと、ツアーの各地点で出迎えるチームに分かれました。ツアー型のイベントを初めて運営する受講生が多く、初日は緊張感が漂っていましたが、ツアーが順調に進行していくにつれ、チーム全体の緊張は徐々にほぐれていきました。

ツアー当日の朝のミーティング

バスガイドを務める受講生 photo: A.T.

旭座で人形とともに出迎える受講生 photo: A.T.

5 アートウィークの企画運営
8月中旬〜2月中旬

リサーチ

受講生はまず、アーティスト、メンターとともに天神・大名地区のまち歩きリサーチやインタビューを行いました。そのプロセスを通じて、普段歩いているだけではわからなかった大名のまちの多層性や歴史が浮かび上がってきました。

ミーティング

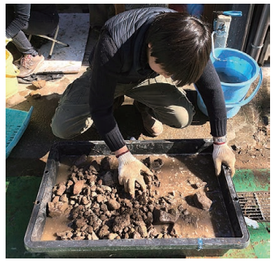
八女と大名という2つの地域をどのように編集して一つの企画にしていくのか？ 3つの場所で行われる企画をどう関連づけていくのか？ 何度も集まって話し合いました。

広報戦略ワークショップ

広報ディレクターの池田美奈子の主導のもと、六角形の「ハニカムカード」という思考のためのツールを用いて、広報メディア同士の親和性や情報の飛距離を検討し、今回のプロジェクトに合う広報戦略を考えていきました。

制作補助

「縁側のながれ」のために八女から大名に運ばれてきた大量の石を洗いました。会場を訪れた人に石を気持ち良く手にとってもらい、八女への思いを託してもらうには、下準備も大切です。



イベント実施

「縁側のながれ」は参加型展示です。訪れた方に受講生が企画趣旨を説明し、八女から運ばれてきた石にメッセージを書いてもらいました。2月11日（土）と12日（日）には、別のイベント会場と「縁側のながれ」をつなぐまちあるきツアーを実施しました。

photo(4点とも) : S.N.

アーティストのドローイングに従って、毎日石の配置を変える。

八女茶をふるまう受講生

来場者への案内

まちあるきツアーの実施風景

REVIEW

総　括

実践コース

遠くて近い人材育成の現場

猪股 春香（SALプロジェクトマネージャー）

ここ最近、アートマネジメントに関わる自分にとっても人材育成の現場が増えてきた。そのかたちはさまざまだが、受講生に対しただ枠組みを提供するのではなく、ともに枠組みからつくっていくことを目指した九州大学のプロジェクトの場合は、受講生がいかに自分ごととしてアートマネジメントを捉えるかが大きかったと思う。アートマネジメントを生業（なりわい）とする人たちと話していると、どこかでアーティストや作品から、新しい価値観を得られた瞬間が存在すると感じることがある。生業にすることがゴールでないにせよ、雷に打たれたようなその原体験が、その人のアートと呼ばれるものとの向き合い方に影響するのではないか。

本プロジェクトの場合、九州大学と八女とが築いてきた積み重ねを理解しながら、素晴らしい作品をつくるアーティストや研究者とともに協働する機会を多くつくることができた。雷を意図的に仕込むのは正直難しいし、個人的にはあまり戦略的にやらないほうが良いと思うのだが、企画側が意識し、起こりうる機会を増やすことは大切だ。人材育成という冠にかまけて、「これってアートじゃなくてもよくない？」と思わざるを得ない課題解決型プロジェクトに陥ってしまうこともあるなかで、そういう意味でも本企画としての特殊性はあったように思う。実際に現場を通して、受講生が企画へ責任を持ち、意欲が加速した瞬間が何度かあった。

人材育成の現場で私たちが併走する相手は、アーティストであり、作品であり、地域であり、受講生ではあるが、一番近くに置くべきは少し昔の自分なのかもしれない。自分自身が何をきっかけにアートマネジメントに関わりたいと思ったのか、当たり前のことではあるが、その瞬間を振り返ることが結果的に受講生と同じ目線で現場をつくることに返ってくるのだ。

column 2

アート・地域・発酵

大澤 寅雄（SALアドバイザー）

私たちは、アートに触れることで、楽しくなったり、癒されたり、元気になったりする。多くの人は「アートとは、心の栄養となって人生を豊かにしてくれるものだ」と考えているだろう。しかし、アートには栄養だけではない面もある。

例えば、アートによって未知の表現に触れて、「楽しい」「美しい」とは思えずに戸惑うこともある。「一体これは何だろう？」とモヤモヤしたものが心に残ることで、今まで「楽しい」「美しい」を規定していた枠組みが、揺さぶられる。そして、見慣れていた風景の見え方や当たり前と思ってきたことの考え方が、変化することがある。

人をモヤモヤさせるアートの作用は、「発酵」に似ていると思う。辞書によると、発酵とは「酵母・細菌などのもつ酵素によって、糖類のような有機化合物が分解して、アルコール・有機酸・炭酸ガスなどを生ずる現象」とある。それになぞらえると、アート（＝酵母や細菌）のもつ未知の表現（＝酵素）によって、人間の心（＝有機化合物）を分解し、モヤモヤ（＝アルコールや炭酸ガスなど）が生じる。それが「心の栄養」だけではないアートの役割だ。

また、アートによる発酵は、人に対してだけでなく、地域に対しても作用することがある。例えば、地域社会の「課題」と思われている物事に、アートが関与することで、その課題を分解し、従来には現れない化学反応が起きる。それは、必ずしも課題を「解決」させるとは限らないが、課題の見え方や捉え方に変化が生じているはずだ。

SALのプログラムの多くが、アートによる発酵を地域に仕掛けようとするものだ。プログラムに関わった人々はモヤモヤに巻き込まれ、また別の人をモヤモヤに巻き込みながら、今まで見慣れていた地域の見え方、当たり前と思っていた考え方に変化が生じたことだろう。その一人ひとりの発酵作用が、さらに周囲に広がり、今後も各地で発酵が続くことを期待している。

Part 1 人材育成プログラム
Section 1 基礎コース
Section 2 実践コース

Part 2 アートプロジェクト FUKUOKA × YAME REMIX
Section 1 アートバスツアー「里山を編む〜天神・奥八女バスの旅〜」
Section 2 アートウィーク「八女の大名茶会」

Part 3 ネットワークづくり
Section 1 ソーシャルアートカフェ
Section 2 SAL × LOVE FM 共同制作ラジオコーナー

photo: S.N.

観光や消費とは違った視点で、人々の交流を促す新しい仕掛けづくりができないだろうか？ このような問いを掲げ、ソーシャルアートラボは、福岡市から八女市黒木町の里山を訪れるアートバスツアーと、八女の資源を福岡市の中心部で展示するアートウィークの2つのイベントを企画運営しました。

Section 1

アートバスツアー「里山を編む〜天神・奥八女バスの旅〜」

ひとと自然が共存する里山。その里山には人と自然のさまざまな記憶が刻まれています。「里山を編む〜天神・奥八女バスの旅〜」は、天神から奥八女（八女市黒木町笠原）をめぐり、棚田と澄んだ空気、そこに生きる人々の暮らしや想いを、アーティストとともに体験する７時間のバス旅行です。

第１回：2016年10月15日（土）
13:15 天神 日本銀行前集合 〜 八女市黒木町笠原地区への旅（夕食付き）〜 20:30頃 天神着

第２回：2016年10月16日（日）
9:45 天神 日本銀行前集合 〜 八女市黒木町笠原地区への旅（昼食付き）〜 17:00頃 天神着

アーティスト：牛島光太郎、五味伸之、ジェームズ・ジャック
イベント企画・制作：
◎九州大学ソーシャルアートラボ
　舞台監督：津田三朗［協力］
　舞台監督助手：石上洋明
　制作統括：長津結一郎、高坂葉月、猪股春香
　監修：尾本章、中村美亜
◎「地域づくりとアート実践プログラム」受講生

主催：九州大学大学院芸術工学研究院ソーシャルアートラボ
共催：公益財団法人福岡市文化芸術振興財団
後援：福岡県、福岡市、八女市、
　　日本アートマネジメント学会九州部会
旅行企画：西鉄旅行株式会社
協力：NPO法人山村塾、ラブエフエム国際放送株式会社、
　　旭座人形芝居、お茶の里記念館
助成：平成28年度文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業

photo: A.T.

アートバスツアー・レポート

2016年10月25日の朝日新聞朝刊（西部・共通・26面）より。

里山×アート　地域再発見

日本の原風景ともいえる里山を舞台にしたアートプロジェクトが九州でも動き始めている。自然や食、歴史などその土地ならではの特色を手がかりにユニークな表現を展開。住民にとっても地域の良さを再発見することにつながっているようだ。

八女　ツアー自体が作品に

2012年の豪雨で被災した福岡県八女市黒木町の笠原地区。このエリアをめぐる、「里山を編む」と題したバスツアーが15、16日にあった。九州大学ソーシャルアートラボ（SAL）が企画。「ツアーそのものが一つのアート」という試みだ。

15日、福岡・天神を出発。笠原地区に入ると、民謡「八女茶山唄」やお茶をもむ機械の音が車内に響く。茶産地の生活はどうだったのだろう。往時に思いをはせる。

家族ぐるみで継承する「旭座人形芝居」の見学や棚田でのお茶会の後、水害で閉鎖されたキャンプ場へ。点在する小屋に入ると天井のスピーカーから自身の人生を語る女性8人の声が流れてくる。米国の芸術家ジェームズ・ジャックのサウンドインスタレーション「八つの土のレイヤー」だ。窓の外を見ながらじっと聴き入る参加者。ありふれた景色だが人々の営みと自然の共存で出来上がっていることに気付かされる。

天井からつり下げられた楽器や衣類、日用品……。旧笠原小学校の体育館は幻想的な空間に一変していた。八女出身の美術家・牛島光太郎のインスタレーション「届かなかった光の範囲」は地域から集めた不用品などが、淡い光に満たされた空間に浮遊する。作品を前に参加者の多くは無言。命が宿ったモノたちがひかれあい、過ぎ去った時間を想起させる。

ツアーで経験した物事が一つの線としてつながり、里山の存在や記憶を立体的に浮かび上がらせる。その手段としての、アートの可能性を感じさせた。

制作統括の1人、SALの高坂葉月さんは「ジャックさんの作品は在りし日のキャンプ場に人が集う姿を想起させ、牛島さんの作品の地元内覧会には70組ほどが訪れ、懐かしみつつ喜んでいた。アーティストが種まきすることで、地域内外に新たな回路が生まれたのではないか」と話す。

安斎 耕一

アーティストとの協働を経験して

小森 耕太（NPO法人山村塾事務局長）

何気ない日常の小物を通じて、地域の人とその記憶を結んでいった牛島さん。石や泥から自然の営み、人と大地の歴史を想像させてくれるジェームズ・ジャックさん。最初は何をする人なんだろう？ と不思議でしたが、ワークショップなどから地域の人たちが日頃考えていることを引き出してバスツアーを企画した五味さん。山村塾は、人と自然、都市と農山村、そして暮らしをつなげることが仕事ですが、3人のアーティストの作業と私たちの仕事が、とても似ていることに気づかされました。生まれてくるものはまったく違うのですが、情報や関係性からアイディアを練り、物事をつくり出していく作業がそっくりでした。

そして作業は似ているのですが、頭に浮かんでいるイメージや将来がまったく違うことと、感情や感性を大切にしていることに多くの刺激を受けました。日頃はついつい理屈、理論で常識的に進めることも多いのですが、それにとらわれない自由な考えを持っていいんだな、と勇気づけられました。地域の魅力を引き出し、豊かな暮らしを創造する上で、こういったアーティストの方々との協働は、新しい視点と勇気をもらえる気がします。

一方で課題も感じます。アーティストの能力はもちろん重要ですが、それを受け止める土台や人材がなくては空振りに終わるかもしれないなと。地域とアートを結び付ける機能をどのように整えるのか、これからのSALの取り組みに期待したいと思います。これからもよろしくお願いします。

photo（5点とも）: A.T.

「里山を編む」

今回は、バスツアー全体をアート作品に仕立てあげました。ツアーの参加者が、美しい棚田が広がる里山の風景と、そこに暮らす人々の営みや思いを感じながら自分だけのストーリーを編むことができるように、演出家の五味伸之がバスツアーの構成を考えました。

「笠原は、自然を材料に使って人工的なものが構築されている。自然のなかにいるってどんなことだろう、と考える。お茶を飲むこととか、買う時に気を使うようになった。これもどれも大量消費なんだな…と実感する。笠原では、季節や時間の流れを含めて考えているんだなと思った。さまざまな選択があっての今の笠原の姿。そして同じように日々、さまざまな選択をしながら生きている僕たち。」（五味伸之）

五味伸之　1985年群馬生まれ。「記憶とのつきあい方」をテーマに演劇活動を行う。プレイバックシアター、まわしよみ新聞を用いた語り合う演劇づくり、演劇とお化け屋敷を組み合せた「劇コワ」など様々な創作活動を行う。福岡市立青年センターとともに総合芸術イベント「くうきプロジェクト」を毎月企画するほか、小学校・元ホームレスの方への演劇ワークショップファシリテーターとしても活動。日本演出者協会会員。福岡恐いもの研究会代表。無倣舎主宰。

制作風景

バスツアー当日、旧笠原小学校の前で話す五味。
「ここはもう使われていない小学校なんですけれども、上の時計を見ていただきますと、時計だけはコチコチとずっと動き続けています。止まってしまった小学校なんですけれども、“止まっているけれども動いているもの”がこれから巡っていく笠原のさまざまな場所でもみなさんに見ていだけるのではないかなと思っております。」

山村塾の小森耕太から、笠原地区の農業について聴く五味。

朝のラジオ体操に参加。

ツアー参加者の声

高度なアート表現であったように思う。わかりにくさも少なからずあったと思う。ツアー全体としては良く、スタッフ、関係者、裏方さんの大変な工夫や苦労が想像できるくらい素晴らしいものであったと思う。五味さんのバスの中のトーク、研究者の冒頭のみのあいさつ、スタッフによる各所でのおもてなし、アート表現（にかかる調整、準備などを含めて）よかった。

冒頭に「自分のストーリーを編んで下さい」といわれた通り、私の心のなかが編み出す私だけのストーリーが体に染み込んだ。

最初はどのようなツアーか予想がつかなかったが、自然を満喫しながら里山を体感しつつアートを感じるというほかにはないツアーでじわじわと感動が生まれた。山からの恵みの空気、ヤギののどかさ、地元の方の美味しい料理、どれも都会では味わうことのない違う時間軸という名の世界を感じることのできた素敵な旅だった。

photo: A.T.

ジェームズ・ジャック
「八つの土のレイヤー Eight Layers of Dirt」

4チャンネルステレオサウンド・インスタレーション　サイズ可変

「この作品は、８人の女性（福岡在住の４人と八女在住の４人）のインタビューで構成されています。女性たちのライフヒストリーを聴きながら、それぞれの女性の生と暮らした土地との複雑な関係に焦点をあてていきました。会話が進むにつれ、それぞれの土地のスピリットが少しずつ現われ出てきます。ここに集められたユニークなストーリーは、８人の強い女性の目を通して見えてくる、土地のもつ複雑なレイヤーを垣間見せてくれます。」（ジェームズ・ジャック）

photo: A.T.

ジェームズ・ジャック　アメリカ出身。瀬戸内国際芸術祭、釜山ビエンナーレ・シーアートフェスティバル、シンガポールの Institute of Contemporary Art などのグループ展で、社会と深く関わるプロジェクトを多数展開。論文や著作は、『ISSUE』、『ジャパンタイムズ』、『モダンアートアジア』、『アートアジアパシフィック』などに掲載された。2008〜2010年に明仁皇太子奨学金フェロー、2015年にはシンガポールの Centre for Contemporary Artの招待作家。現在は、ソーシャルアートラボのアーティスト特別研究員。

制作風景

❶まずは地域のリサーチから。笠原の風景の奥にある人々の生活に思いを馳せるジャック。

❷8人の女性へのインタビュー。1人目は、NPO法人山村塾の原愛子。蝉しぐれが心地良い神社の境内で話を聴いた。

❸地域の方々と慎重に議論を重ねているジャック。

❹4年間閉鎖されていたキャンプ場のバンガロー清掃を、80日間里山ボランティアが手伝った。

ツアー参加者の声

ジャックさんの作品は大いに予想を裏切ってこう来るか…という面白い試みだと思う。一人ひとりの生きざまを織りなすことで未来の八女が見えてくるもの…貴重な実践だと思う。

ジャックさんの作品は特に一人で静かに語りを聞いていたいような気持ちになりました。

自分の記憶を五感でつむぐことができた旅でした。ルートの大切さも実感しました。特にジャックさんの窓から見える景色と音（インタビュー）は色んな感覚が呼び覚まされました。今の自分と今日の旅。編んだストーリーを何かで表現してみたいです。

photo（4点とも）：A.T.

牛島光太郎「届かなかった光の範囲」

笠原小学校からお借りしたもの、笠原の方から提供いただいたもの、
カッティングシートの文字

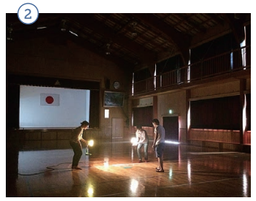
「この作品をつくるために、可能な限り、笠原に通いました。笠原にお住まいの方に、使用しなくなった日用品やテーブルライトをお借りしました。また、廃校となった小学校からは、廃校になる前に使用されていたモノをお借りしました。
お借りしたモノを眺めていると、ふと使っていた人たちの生活を垣間見たような気になります。今回の展示は、笠原の人たちの手元を照らしてきたテーブルライトを光源にして、文字どおり、笠原のモノに光をあてるというものです。」（牛島光太郎）

牛島光太郎　1978年八女市生まれ。2010年「意図的な偶然」（三菱地所アルティアム）、2012年「意図的な偶然」（LIXILギャラリー）、2014年「scene のつくり方」（Gallery PARC）などの個展や、2014年「イマジネーション・スーパーハイウェイ」（京都芸術センター）などのグループ展に参加。ドイツ、台湾、ニューカレドニア、中国などでアーティスト・イン・レジデンス。2016年2月から8月まで、大阪府茨木市でアートプロジェクト〈HUB-IBARAKI ART〉を実施。
www.ushijimakoutarou.com

地域向け内覧会

日時：10月14日（金）・15日（土）18:00-20:30
場所：旧笠原小学校体育館、きのこ村キャンプ場
何カ月もかけて準備し、たくさんの人の協力を得て制作した大掛かりな展示。ぜひとも地域に住まう人々にも体験していただきたいとの思いから、バスツアー前日と1日目の夕方に、地域住民向けの内覧会を実施しました。笠原地区や隣接する地区からたくさんの人が車で足を運んでくださり、総勢80組ほどが訪れました。

制作風景



❶古民家、茶工場、廃校小学校の体育館などを回り、展示場所のリサーチ。最終的に、旧笠原小学校の体育館に決定した。
❷カーテンを閉めて真っ暗にした体育館の床に、仕掛けを施している。

ツアー参加者の声

最後の体育館でのアートは、何か心に郷愁をよびおこすものでした。奥八女の澄んだ夜の暗さのなかにポッとともるランプの光で照らし出された笠原の物たち。

「みえないこと」でそれぞれの場所や作品がつながっていて、笠原地区の概略がわかるツアーだった。最後の牛島光太郎さんの作品で自分の子どもの頃の記憶が浮かんできて、時の流れを感じ想像することが面白かった。

内覧会感想

体育館の展示物が興味深かった。生き続けると人はいろいろなものをなくす、と改めて思った。

育った場所を思い返し、色んな人、色んな出逢いがあった。この体育館という場所で作品をみせて頂いた意味… まだわからないが、何か意味があってこの場所に来れたことに感謝します。

REVIEW

総　括

アートバスツアー「里山を編む〜天神・奥八女バスの旅〜」

長津 結一郎（SALコアメンバー）

本番までのあいだ、私たちは何度も八女市黒木町笠原地区に足を運んだ。これまで環境設計学科を中心として培ってきた縁を、さらに深め広げることを目指し、あいさつ回りをし、お願いごとに明け暮れた。

アーティストたちの地域との関わりには目を見張るものがあった。早々に体育館での作品展開を決めた牛島光太郎は、地域の記憶が重なり合うダイナミックなインスタレーションをつくり上げた。毎日のようにあった地域の方々からの差し入れや茶飲み話も、現場に豊かな時間をつくりだしていた。ジェームズ・ジャックはきのこ村キャンプ場を守る地域の人々と連日酒を酌み交わし、夢を語り合い、ともに作品をつくりあげた。その経験は、地域にどのように残るのだろうか。そしてこうした関わりを来場者にもひらく役割を担った五味伸之は、作品だけでなく地域の歴史や風景をたどるルートを考案し、作品鑑賞体験と観光としての体験の混在を意図的に作り出し、観客たちを魅了した。

受講生たちは、企画・運営・広報とアーカイブ、という3つのグループに分かれ、アーティストたちやSAL事務局の先導により進んでいく企画を補助し、時には企画の根幹に関わるアイディアを提起した。初めての試みを体現することを目指し、立場を問わず、関わる人々それぞれが、時に立場を超えながら七転八倒してきた。

笠原地区で出会ったとある方に言われた「何かをはじめるには、まず10年続けなきゃな」という言葉は、今も深く心に残る。反省点も多々あれど、SALが目指す地域とのアートの関わりについての、ある一定の方向性が示された企画だったように思う。協力いただいた各位に改めて感謝を申し上げたい。

column 3

アートバスツアーの可能性、それは新鮮な文脈との出会いか

朝廣 和夫（SALコアメンバー）

「地域づくりに果たしてアートは有効なのか？」、この大きな問いに私たちは、「地域を編む力」、すなわち、地域の資源を編集し表現し、伝えることと考えた。それは、棚田に彫刻（コンテンツ）を置くことではない。農家の棚田の営み、その存在がコンテンツである。アートは、そのコンテクスト（文脈）を如何に捉え、参加者に伝えるのか。これが、今回の命題であり、批判すべき点である。バスツアーは大いなる試行であり、第一歩である。生産物が売れるのか、観光客が増えるのか、そのような成果は将来の副次的なことである。大切なのは、里山の自然や農家の営みに価値があり、アーティストの活動を触媒に鑑賞者が体現することと考える。

バスツアーは3名のアーティストにより行われた。朝、バスで八女市黒木町の景色が流れるなかで、五味伸之氏からさまざまな地域にまつわるお話が紹介された。一日の行程のなかには、八女茶山唄を聞き、茶畑でお茶を試飲し、地元の料理をいただく。地域の良さが一つのシナリオとして紡がれたように思う。ジェームズ・ジャック氏の作品は、小屋のなかで地元の女性の声を聴く。窓に切り取られる風景に見えない人の気配を感じた。牛島光太郎氏の作品は、体育館の闇に光を反射する床面と空間に多数の使われなくなった物が浮遊していた。「モノとの一期一会」のような、圧倒的な力を感じることができた。

いずれの場所も、まちの人には新しく、地域の人には馴染みであろう。しかしながら、提示された文脈は新鮮であったのではないだろうか。普段、存在していても、接することのない良い人、良い店、良い景観がある。その価値を切り取ることはアーティストの仕事であると、そう、感じたひと時だった。最後に、準備をされた受講生をはじめ、地域の方々の多くの労に感謝する。

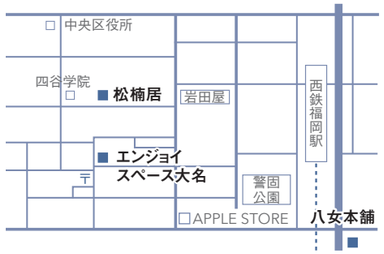
photo: A.T.

武家屋敷と職人の仕事場の痕跡を残す「大名」の町並み。
格子状になった町の随所に「八女」の自然と風土に育まれた茶を配する試み。
それが「八女の大名茶会」です。
大名の一角にある「松楠居」という昭和初期の木造民家を舞台に
いくつもの茶の出来事が展開します。
その出来事を縫うように、網の目になった大名の通りに出現する
小さな「茶事」が人と場をつないでいきます。
さまざまに仕掛けられた茶が織りなす網目。
そのなかで自在に結びつく「茶の交差点」をたどってみる。
ゆったりと八女の茶に興じる大名茶会。

Section 2

アートウィーク「八女の大名茶会」

大名の一角に佇む昭和初期の民家「松楠居」を「家」、古民家を改築したギャラリー「エンジョイスペース大名」を「縁側」、八女の物産館「八女本舗」を「庭」と見立て、大名に八女が浮かび上がる如月のひと時をつくり出しました。ゆったりと芸に興じる茶三昧から、石を通じて八女の過去と未来に想いを馳せる参加型展示、八女の物産に新しい方向から光を投じる試みによって、人と人、人と物事が新しい方法で出会い、結ばれる仕掛けをほどこしました。



2017年2月4日（土）～12日（日）
I. 松楠居の茶三昧　II. 縁側のながれ　III. 庭先の照花

ダイレクション：藤枝守（全体）、池田美奈子（広報）、ジェームズ・ジャック（「縁側のながれ」企画）
企画特別協力：大田こぞう（LOVE FM「月下虫音」DJ）
主催：九州大学大学院芸術工学研究院ソーシャルアートラボ
共催：公益財団法人福岡市文化芸術振興財団
後援：福岡県、福岡市、八女市、日本アートマネジメント学会九州部会
協力：ラブエフエム国際放送株式会社、八女市商工観光課、八女本舗運営協議会、NPO法人山村塾、春々堂
助成：平成28年度文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業

I. 松楠居の茶三昧

期間：2月10日（金）～ 12日（日）
ダイレクション：藤枝守
会場：松楠居
インスタレーション「松楠居を結ぶ」：武内貴子（現代美術家）
空間展示協力：平野蘭（Artphoto）
櫨蝋燭：牛島智子（現代美術家）

松楠居を舞台に繰り広げられた茶の三日間。「茶をかたる」というトーク・シリーズをはじめ、「闘茶」という参加型ワークショップや「茶を弾じる」という筑前琵琶のライブ、そして、八女の茶の電位変化にもとづく《茶の植物文様》がクラヴィコードによって演奏されました。さらに、月を愛でながらの箏歌《月読三歌》に引き続き、「十六夜（いざよい）の夜想茶会」というパフォーマンスでは、笙やガムランの響きのなかで茶事を取り入れた耽美な月読の時間が展開していきました。

松楠居の茶三昧～ダイレクション・レポート

藤枝 守（SALプロジェクトメンバー）

「八女の大名茶会」のメイン・プログラムとなったのが「松楠居の茶三昧」。昭和初期の木造家屋の二階の大広間を舞台にして、3日間という会期をグリッド化した時間枠のなかに、さまざまな演目と、それらに付随する茶会を組み入れてみた。そのとき、「茶を喫する」という振る舞いを通じて生まれる場への気づきや、そこに居合わせた人たちとのつながりをさらに促すような仕掛けを試みたのである。このあらたな仕掛けは、古来からの「茶が結ぶ」という文化的なコードに基づきながらも、「松楠居」という場のなかでさまざまに、そして大胆に実践されている。

まず、茶の生産者や茶人、製茶の達人、茶酒房の亭主など、さまざまに茶に関わる方々を結びつける試みがトークセッションだった。そこで語られたストーリーは、茶へのこだわりや極意、メタファーなど、茶という存在が現在に至るまで計り知れないイマジネーションを与え続けてきたことを再確認する場ともなった。さらに「闘茶」といわれる参加型のワークショップとともに、茶の発酵の度合いが醸し出す香りや味わいといったダイレクトな体験が加わると、われわれのもつ微細な感覚が次第にひらかれていくことを実感する。

このような茶の体験とともに、「茶を弾じる」という筑前琵琶や、茶の電位変化に基づく「茶の植物文様」（藤枝守作曲）と題されたクラヴィコードの公演は、茶からのあらたな表現を模索する機会となった。そして、最終日の2月12日が「十六夜（いざよい）」であることを想定した「月読の夜想茶会」というパフォーマンスでは、八女の土地で産出された櫨（はぜ）の蝋燭の淡い光のもと、ほうじ茶の炒る芳ばしい香りが会場全体に漂い、しずかに「夜想の茶事」が展開した。

三昧とは、安定した精神における瞑想的な境地のこと。八女で育まれた茶を喫しながら、その境地に思いをめぐらせていく。そして、月読という時間の経過のなかで、さまざまなシンクロニシティとともに過ごす一期一会のひととき。茶とかたり、茶をうたい、茶にむすばれる、まさに茶三昧の三日間となった。

藤枝守　カリフォルニア大学サンディエゴ校音楽学部博士課程修了。博士号（Ph.D. in Music）を取得。《オーケストラの修辞学》で第5回入野賞、第7回日本現代藝術奨励賞。国立劇場、東京混声合唱団、神奈川芸術文化財団、オーケストラ・アンサンブル金沢、ジャパン・ソサエティなどから委嘱を受ける。著書に『響きの考古学』など。最近のCDとしては、西山まりえの演奏による《ゴシック・ハープの植物文様》やサラ・ケイヒルのピアノによる《Patterns of Plants》など。九州大学大学院芸術工学研究院教授。

photo（3点とも）：S.N.

2月10日（金）　プロローグ＊茶につどう夕べ

19:00　トーク＋ワークショップ「闘茶会」

★ゲスト：小森耕太（NPO法人 山村塾）＋原島政司（お茶の千代乃園）

「闘茶」とは、5種類の茶の香りやかたち、味から茶葉の違いを当てるゲーム。鎌倉時代にはじまり、かつては賭博の対象でもあったという。原島政司さんのナビゲートのもと、現代によみがえった「闘茶」に挑戦。

2月11日（土）　part Ⅰ＊茶をかたる一日

13:30　茶をかたる（1）「茶の発酵」
茶とあそぶ「茶八変化を楽しむ」

★出演：上原美奈子（「夢みる茶畑」代表）　★ゲスト：原島政司

緑茶、白茶、黄茶、青茶、紅茶、黒茶など、発酵の度合いによってさまざまに姿を変える茶。上原美奈子さんの柔らかな語りに誘われて、不思議な「茶の八変化」を体験。

16:00　茶をかたる（2）「結納茶と水引」

★出演：長澤宏美（博多水引デザイナー）　★ゲスト：古賀勝裕（古賀茶業）

九州では、茶が結納の貴重な一品。そこには、婚姻における語呂合わせが織り込まれているという。斬新な水引のデザイナーである長澤宏美さんが、茶を通じて浮かび上がる結納と水引との結び合う意味の綾を解明。

17:00　八女の櫨蝋燭（はぜろうそく）を灯す

★出演：牛島智子（現代美術家）

八女は櫨の産地。その実を使った蝋燭づくりのワークショップを実践する八女在住のアーティスト、牛島智子さんが自らの櫨蝋燭を灯す。

18:30　筑前琵琶ライブ「茶を弾じる」

★出演：寺田蝶美（ちょうび）（筑前琵琶）

秀吉が筥崎宮（はこざきぐう）に逗留したおりに、利休とともに博多湾を臨む千代松原で催された茶会を題材にした寺田蝶美さんの新作「釜掛（かまかけ）の松」をはじめ、「分福茶釜」などの音曲が博多発祥の筑前琵琶によって弾じられた一晩。

photo（このページすべて）：S.N.

2月12日（日）　part Ⅱ＊月読の大名茶会

13:30　茶をかたる（3）「万（yorozu）の茶」

★出演：徳淵卓（万〈yorozu〉亭主）　★ゲスト：山口真也（星野製茶園）

福岡市内の一角にたたずむ茶酒房「万」。大きな円筒状の銅製の炉が中央に据えられたその空間でしなやかな所作とともに茶をもてなす亭主の徳淵卓さんと、八女の星野村で生まれ、最高の製茶の技を極める山口真也さんとの茶談義。

16:00　クラヴィコード・ライブ「茶の植物文様」

★出演：砂原悟

「植物文様」とは、植物の電位変化をメロディックに変換した作曲シリーズ。今回は、八女の茶にもとづく《茶の植物文様》（藤枝守作曲）が砂原悟さんのクラヴィコードによって初演。そのフラジャイルな響きのなかに、転写された茶の「いのちの軌跡」を聴く。

18:30　「月読（つくよみ）の夜想茶会」
第一部：箏歌ライブ「月読の植物文様」

★出演：中川佳代子

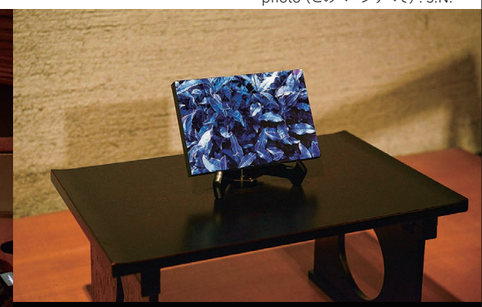
月の満ち欠けを「読む」ことによって、潮の干満や身体的な変容との一体感を得ることができる。2月12日は、満月の次の「十六夜（いざよい）」にあたるが、そのためらうように出づる「十六夜」を愛でながら、箏歌《月読三歌》（藤枝守作曲）を中川佳代子さんが詠唱。

第二部：パフォーマンス「十六夜（いざよい）の夜想茶会」

★出演：徳淵卓（茶人）、太田垣みどり・須藤美香・吾郷文恵（客人）
濵田理恵（舞）、中川佳代子（箏）、渡辺融（笙）、
福岡ガムラン倶楽部「LOU」

《月読三歌》をプレリュードとして、笙やガムランの響きを背景に「十六夜」と名づけられた笛をたずさえた舞が登場。「夜想茶会」の場がしだいに整えられていく。そして、櫨蝋燭が灯されたなかで、三人の客人を迎えての「夜想の茶事」。松楠居の窓越しにあらわれる十六夜。

photo（このページすべて）：S.N.



II. 縁側のながれ（From Stone to Sand）

期間：2月4日（土）～2月12日（日）
場所：エンジョイスペース大名
ダイレクション：ジェームズ・ジャック（プロフィール→P27）
特別協力：大田こぞう（LOVE FM「月下虫音」）
制作：「地域づくりとアート」実践プログラム受講生

「石から砂へ」というメタファーを用いながら、二つの場所の間にある時間と空間を想起し、「ながれ」について思いを巡らす参加型展示を実施しました。福岡と八女という一見異なる二つの場所について、日常を織りなすさまざまなレイヤー（層）に目を向け、両者のつながりを浮かびあがらせました。

photo（2点とも）：A.T.

photo: S.N.

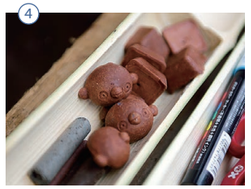
制作の舞台裏

石を介した交流のアイディアは、2016年、SALとラジオコーナーを共同制作しているLOVE FMのDJ大田こぞうさん（42ページ参照）が、八女と福岡をつなぐ仕掛けとして提案してくれたものでした。八女市黒木町笠原地区は、2012年の九州北部豪雨による水害で大きな被害を受けた地区で、いまだ復興の途上にあります。八女からやってきた石が天神エリアに一定期間置かれ、天神を訪れる人たちによって何かを施された後に再び八女に帰っていく――このアイディアを発展させて、面白い参加の仕組みを考えたい。そのストーリーを、八女に暮らす人々にとっても意味あるものにつなげていきたい。このような思いから、アーティストのジェームズ・ジャックさんと八女市黒木町笠原地区で里山保全活動を継続するNPO法人山村塾事務局長の小森耕太さんが、プロジェクトに加わりました。

1月半ば、NPO法人山村塾に台湾から来ていたボランティアスタッフの協力を得て、水害以降に耕作放棄地となった棚田の石垣の裏にある石（ぐり石）を掘り起こしました。集められた1.2トンの石が、カラフルな肥料袋に入れられて、2月初旬に大名にやってきました。田んぼから掘り起こしたばかりの石は泥だらけで、人が手にとって何かを書くのは難しそうでした。そこでSAL事務局のスタッフと受講生で2日間、寒空の下、ひたすら石を磨いて天日干しをしました。

そのようなプロセスを経て使えるようになった大量の石は、ジャックさんのドローイングに従って、毎日異なる配置で床に置かれます。笠原の谷をイメージした日もあれば、大名のお堀をイメージしたという力強い一直線の日もありました。会場を訪れる方は、目の前に積まれた石がたどってきた道のりと時間に思いを馳せながら、ペンや土でつくったクレヨンを手にとって、石に思いを託しました。

会場となったエンジョイスペース大名には、8日間で300人以上の方が訪れ、絵やメッセージを石に描きました。LOVE FMのラジオを聴いたリスナーさんも続々訪れ、石洗いや石の並び替え、石の搬出まで手伝ってくれました。最終日を迎え、たくさんの人の手がかかった石は、再び笠原の田んぼへと帰っていきました。これから笠原の棚田づくりに使われていきます。



❶八女視察 ❷石に文字を書く実験中 ❸石洗いの手伝いに来てくれた「月下虫音」のリスナーさん
❹八女の土で作ったクレヨン（photo: A.T.）

制作メモ

ストーリー（文脈）づくり

八女（笠原）▸大名▸八女（笠原）
《マネジメント》
- 大田さんとの話し合い
- 大田さん、ジャックさん、小森さんTT打ち合わせ設定
- 八女視察　etc.

しつらえ

八女（笠原）in 大名
パスツアーのときのジャック氏の作品の一部
八女（笠原）の石
八女の茶箱
《マネジメント》
- 展示場所のリサーチ
- 展示場所オーナーへの説明
- 石のリサーチ
- 石のサンプル手配
- 石掘り起こしの手配
- 石運搬の手配
- 石洗いの人・道具確保
- 茶箱の運送手配
- 写真家への許可申請
- 写真拡大プリントアウト
- 照明器具の手配
- 石を動かす人と道具の確保　etc.

参加のしくみ

- 訪れた人に企画趣旨を理解してもらうための説明
- 八女茶の紹介と試飲

《マネジメント》
- facebookやインスタグラムで広報
- ラジオで広報
- 通りすがりの人への広報
- 石に書くための素材集め
- 八女の土と灰でクレヨン作り
- 展示環境の整備（灯油手配等）
- 監視マニュアル作り　etc.

photo（左2点）：S.N.

photo（右2点）：A.T.

2月4日（土）　トーク＋レセプション

17:00　生きる土（The Life of Dirt）
★出演：大橋鉄雄（お茶の大幸園｜八女・笠原）、ジェームズ・ジャック（アーティスト）、大田こぞう（LOVE FM）

18:30　糅て音〈かておと〉（Sound Mix）
★出演：MASUO（CAS Fukuoka）

八女市黒木町笠原でお茶を栽培する大橋鉄雄さんと、アーティストのジェームズ・ジャックさん、LOVE FMのDJ大田こぞうさんが、土について語り合いました。大橋さんからは、過去から受け継いだ土を今預かっているという感覚で土に向き合っており、土をどのように次の世代に渡していくかを常に意識しているという話がありました。

トークに続いて、DJのMASUOさんが、八女の音と福岡の音を使ったMix音源のライブ演奏を行いました。ライブの後は受講生がオーガナイズしたレセプション。八女ゆかりの食材を楽しみながら、来場者との交流を深めました。

photo（3点とも）：A.T.

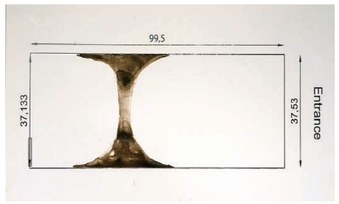
2月5日（日）　汽水域の渦（Brackish Water Swirl）

14:00　映画「まちや紳士録」上映会
15:30　トークイベント
★出演：伊藤有紀（映画監督）、渡邊瑠璃（ART HUB 三樹荘）

伝統的な町家の町並みが残る八女福島をテーマとした映画「まちや紳士録」の鑑賞会を行いました。上映後、映画監督の伊藤有紀さん、福岡市内にアーティストの滞在制作拠点を営むアーティストの渡邊瑠璃さんを交え、今大切にしたい価値観を語り合いました。（汽水域とは、海水と淡水の両方から構成されている水域を指します）

photo: A.T.

ジェームズ・ジャックのドローイング



photo（3点とも）：A.T.

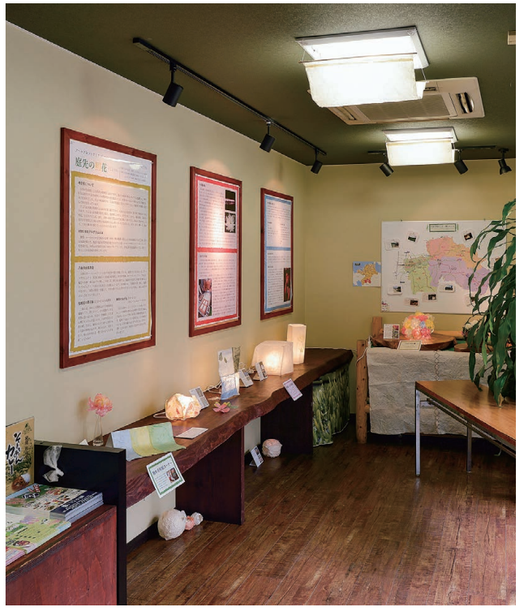
ウォールナッツインクで描かれたドローイングは全部で8枚。このドローイングに従って、会場の石の配置が毎日変えられた。

III. 庭先の照花

期間：2月6日（月）～ 11日（土）
会場：八女本舗
制作：九州大学ホールマネジメントエンジニア（HME）育成プログラム

※HME育成プログラムとは
劇場・ホールなどの文化施設の音響・照明・舞台機構に関する工学的知識を備えた、施設の総合的管理運営能力を有する人材（＝ホールマネジメントエンジニア）を育成する、九州大学大学院芸術工学府修士課程のプログラム。

HME育成プログラムの大学院生が、「八女の再発見」をコンセプトとし、電照菊と和紙に着目した展示を行いました。八女本舗は福岡市の中心部天神にある、八女の物産を扱うアンテナショップです。天神のまちなかで里山の空気を感じられるよう、展示と合わせて、八女の音（自然音、茶摘み歌、茶工場の機械音）と都市の環境音をコラージュ/再構築したMix音源（制作：DJ MASUO）が流れる空間をつくりました。



photo（このページすべて）：S.N.

当日掲示された八女について紹介するポスター

MASUO　1974年長崎生まれ、東京/練馬育ち。歌舞伎町を主戦場に大小幾多のDJ/パーティーを経て、1998年DJ Noriなどとともに立ち上げた“Sunday Afternoon Session ~ Gallery”では、David Mancusoとの邂逅からパーティー観を根底から見つめ直しサウンドシステム面の中心を担う様になる。近年は、新たな試みとして最高級のオーディオで名盤を紹介/鑑賞する新感覚のリスニング・セッション“Classic Album Sundays”を日本で開催し、大きな話題を呼んでいる。

REVIEW

総　括

アートウィーク「八女の大名茶会」

高坂 葉月（SAL事務局長）

八女といえば茶。昔から人と人を結んできた茶事をテーマに、八女と大名という2つの地域を重ね合わせる試みを行った。地域のどこに着目し、どう編集して再構築していくのか？議論と試行錯誤を重ねた。

藤枝守は大名の格子状の町並みに目を留めた。松楠居のプログラムは2時間半ごとに組み、大名のグリッドを時間軸上に再現。さらに建物内部にも格子のインスタレーションを配する徹底ぶり。格子にはめこまれた7つの茶事を通じて異分野の人々が交わり、それぞれが根をつなげて有機的に連関するさまが見える。作曲家ならではの時空間の構成力と、彼が長年かけて育んできたコミュニティの豊かさが一堂に会した企画だった。

「縁側のながれ」では、ジェームズ・ジャックが大名に奥八女・笠原の風景を出現させた。毎日配置が変わる石。時間の経過とともにあらわれる「ながれ」。異なる時空間を重ね合わせるという方法で、八女の過去・大名の現在・八女の未来をつないだ。ひらかれた参加の仕組みを考案し、多くの人の協力があってこそ実現できた企画である。

「庭先の照花」の制作をした大学院生たちは、茶の陰に隠れがちな八女の電照菊と和紙にフォーカスした。現代美術家の牛島智子さんから和紙についてのレクチャーを受けて小さな作品とパネルを展示し、サウンドアーティストのMASUOさんの協力を得て八女・福岡のミックス音源を準備し、普段とは一味違う空間をつくり出した。

今回のプロジェクトでは、人材育成という点では難しさを感じる局面が多かった。アーティストや地域の人との密なやり取りは、流動的な企画の全貌を把握できる事務局が担わざるを得ない。受講生に、アーティストや異なる立場・異なる地域の人たちのはざまで戸惑いを抱かせてしまったことは申し訳なく思っている。しかし同時に、地域協働型のアートプロジェクトを動かす難しさも伝わったかもしれない。たくさんの人の思いや事情が交錯するなかでアートマネージャーに求められているのは、アーティストのプランをいち早く理解し、周りの人々の理解と協力を得ながら、実現に向けたプロセスを一つひとつ丁寧に設える技術なのだと思う。

column 4

企画におけるコンセプトと編集的思考

池田 美奈子（SALプロジェクトメンバー）

当然ながらあらゆる企画にコンセプトは必要である。コンセプトとは、企画の根本にある考え方であり、それが企画全体の方向性を決める。コンセプトはブレないことが重要で、企画の隅々にまで反映されることになる。しかし、どの段階でどのようにコンセプトが固まるのかは一筋縄ではいかない。普通は先に確固としたコンセプトがあって、企画がはじまると考えられている。しかし、現場ではそういかないケースも多い。

まず、コンセプトとアイディアの関係について考えてみる。コンセプトとアイディアは混同されがちだが、基本的にアイディアはコンセプトを構成する要素であり、コンセプトを実現するための手段である。しかし、何か企画を立てようとすると、コンセプトが固まる前に多くのアイディアが出ることが多い。つまり構成要素の方が先に出てきて、それを束ねるコンセプトが見当たらず右往左往する。企画はこう着状態に陥り、一刻も早くコンセプトを考えて追いつこう、あるいは最初に戻ってコンセプトから出直そうという議論がはじまる。

私は自分の専門分野に「編集」を含めている。「情報価値編集論」という大学院向けの授業も担当していて、最初の時間に「編集とは何か」について話すのだが、「編集とは、世の中に散在する物事を観察、収集し、独自の視点をもって分類・整理・再構築することにより新たな文脈をつくり出す一連の作業である」と定義している。これは編集者の実務経験から直感的に導きだした定義だが、今まで矛盾を感じていないので、妥当な定義だといえるだろう。

今年度のソーシャルアートラボの企画の柱である「八女の大名茶会」が実現にこぎつけるまでのプロセスは、上記の定義における編集のプロセスをたどったと感じている。最初、多くのプレイヤーとアイディアが断片として散在しているように私には見えた。コンセプトが見えるようで見えてこない状況があったように思う。コンセプトが固まっていて、それを実現するためのアイディアを考えるというトップダウンの構造でないことに、関係者は焦りを感じはじめていたかもしれない。その状況を見ながら編集的思考が有効なのではないかと直感した。存在するたくさんのアイディアの断片を見渡して、そこにストーリーが見出せれば、それを捉えて断片を配置しながら文脈をつくる。そのストーリーのテーマがコンセプトとなる。

編集的思考は無理をしない。目の前にすでにある素材やアイディアの断片に耳を傾け、それらが訥々（とつとつ）と語り出す話をすくい上げながら、丁寧に形を整えるなかでテーマが明確になっていく。自然と中心が生まれ、求心力を持って旋回し、周囲を巻き込み、力強い説得力のある「物語＝企画」に結実するのだ。

Part 1 人材育成プログラム
Section 1 基礎コース
Section 2 実践コース
Part 2 アートプロジェクト FUKUOKA × YAME REMIX
Section 1 アートバスツアー ～里山を辿る～天神・奥八女バスの旅～
Section 2 アートウィーク「八女の大名茶会」

Part 3 ネットワークづくり

Section 1 ソーシャルアートカフェ
Section 2 SAL × LOVE FM 共同制作ラジオコーナー

Section

1 ソーシャルアートカフェ

地域をひらく芸術文化活動を実践している方をお招きし、その取り組みとノウハウを共有しながら
ネットワークを形成することを目指し、「ソーシャルアートカフェ」を実施しました。

第1回

〈テーマ〉

ネイティブカルチャーとしての神楽の現在形

5月31日（火）19:00-21:00

ゲスト：三上敏視（音楽家、神楽・伝承音楽研究家）
聞き手：大澤寅雄（SALアドバイザー）

神楽・伝承音楽研究家として全国の伝統芸能の調査を行う三上さんが、民俗芸能や伝統芸能の多様性について講演しました。

番外編

〈テーマ〉

アートプロジェクトのこれから：あいちトリエンナーレとソーシャルアートラボの取り組みを通して

6月20日（月）10:00-11:30

ゲスト：港千尋（あいちトリエンナーレ2016芸術監督）

あいちトリエンナーレ2016の芸術監督を務める港さんが、これまでのあいちトリエンナーレでの取り組みを紹介しながら、メディアの活用と人の巻き込みの重要性について語りました。熊本震災支援で九州入りしていたアーティストの村上タカシさん（MMIX LAB／宮城教育大学）も議論に加わりました。

第2回

〈テーマ〉

地域をひらくアート「大分編」

8月27日（土）15:15-18:00

ゲスト：二宮圭一（大分美術研究所主宰）
原茂樹（日田シネマテーク・リベルテ支配人）
後藤雅人（竹田市企画情報課・竹田移住プロジェクト担当）

大分大学福祉科学研究センターとの共催で、県外で初となるソーシャルアートカフェを実施しました。大分で地域をひらく文化活動を実践している3名をゲストに招き、具体的な取り組みとノウハウを共有しました。

第3回

〈テーマ〉

アートプロジェクトを“作曲”する

12月17日（土）15:00-17:00

ゲスト：樅山智子（作曲家）

国内外で幅広く活動する作曲家の樅山さんが、標高5000mのヒマラヤの村でのワークショップの様子や、南アフリカの炭鉱で録音した音を素材とした作曲の様子を話しました。樅山さんがその土地に受け継がれるモノ・音・記憶に耳を澄まし、それを自身の感覚をとおしてリデザインし、他人と共有する仕組みとして提案する様子がうかがえました。

第4回

〈テーマ〉

地域で発酵する／地域を発酵するアート

1月22日（日）13:30-17:00

ゲスト：花田伸一（佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授・キュレーター）
梅木誠太郎（月刊フリーペーパー『モテモテさが』編集長）
塩月悠（長崎純真大学児童保育学科講師・アーティスト）

佐賀大学芸術地域デザイン学部との共催で、佐賀市内のアートスペースでソーシャルアートカフェを実施しました。和やかな雰囲気の中で、3人のゲストが取り組みを紹介しながら自身のアート観について語りました。

Section 2

SAL × LOVE FM 共同制作ラジオコーナー

LOVE FM

九州北部地域を中心に国際放送を手がけているラブエフエム国際放送株式会社と、ラジオを活用した地域間交流に関する共同研究を行いました。FUKUOKA × YAME REMIXのひとつの企画を共同実施する（35ページ）とともに、LOVE FMの夜の人気番組「月下虫音」のコーナーを共同制作しました。

共同制作コーナー「かもしとーと？ ～ソーシャルアートで地域を発酵～」

毎月第２木曜日、22:30～22:45に放送されたこのコーナーでは、創造的なアイディアが地域に根付くプロセスを「発酵」ととらえ、それを仕掛ける人＝“カモシスト”（醸す人）に着目しました。ラジオを通じて“カモシスト”を紹介し、構想に至る経緯や具体的ノウハウの情報共有をはかりながら、社会の課題を豊かさに変える知恵を共有するプラットフォームを構築することを目指しました。
放送後はそのコンテンツをWEB上で聴けるようにして、アーカイブ化を行いました。
http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/radio_archives/

大田こぞう　昆虫DJ。LOVE FM「月下虫音」DJ。
誕生日：1月6日
血液型：O型
出身地：Fukuoka
興味あること・趣味：茂み遊び
好きな音楽：Penguin Cafe Orchestra、Sex Pistols

第1回　6月9日

〈テーマ〉「カモシスト」って何？

ゲスト：中村美亜（SAL副ラボ長）

地域の外に1回出て帰ってきた人とか、ほかのところから移り住んできた人が、もともと地域にあった自然や文化と出会った時に新しいコトを起こしてる例がたくさんあって、面白いなと思ったんです。そういうのって、最初はたいてい変なコトなんですが、馴染んできて面白いって思えてきたり、それなら私もそこで何かしたいなって思えるコトが起こってるのをいくつか見てきて、これはいいぞと。こういう人って発酵させてない？って言ってたら、こぞうさんが「カモシストでは？」と言ってくださったんですよね。

第2回　7月14日

〈テーマ〉土にこだわる

ゲスト：ジェームズ・ジャック（SALプロジェクトメンバー）

土は地層によって特徴がだいぶ変わるし、固い石もあるし柔らかくて手ですぐつぶせる石もあります。土はその場所の記憶だと思っています。つまり、昔からいろいろな虫とか植物が住んできた環境の一部が土なんですよ。

第3回　8月11日

〈テーマ〉国東には国東固有の時間がある

ゲスト：松岡勇樹（株式会社アキ工作社代表取締役）

今まで自分がやってきたのって借り物の時間なんじゃないかなという思いが自分のなかにあって。東京には東京の、国東には国東の時間があるんじゃないかと。その場所独自の時間を、自分の身体のなかに蓄えていって、ビジネスもそういう時間を使って、一から組み立て直せるんじゃないかということが、そもそもの発想なんですよね。

第4回　9月8日

〈テーマ〉糸島二丈と世界をつなぐ

ゲスト：松崎宏史（株式会社Studio Kura代表取締役）

やっぱり糸島二丈の田んぼのなかを、アーティストがチャリ集団でいるとけっこう目立つので、だんだん人が集まってきてくれるようになったというか。気がつけばもう140人ほどのアーティストの方々が、糸島にレジデンスに来てくれてるんです。

第5回　10月13日

〈テーマ〉里山の技と叡智

ゲスト：小森耕太（NPO法人山村塾事務局長）

最近思うのが、この何十年、農家の人たちは人に教えることを忘れてたんじゃないかな、って。地域の人たちと話をしていて、息子さんが都会に出ちゃっているので、「人に教えたことない」ってことをよく聴くようになったんです。今は僕たち山村塾のメンバーの人たちがそういう技術を受け継ぐことができてるので、やってきて良かったなって思ってます。

第6回　11月10日

〈テーマ〉筑後のものづくりを世界に発信

ゲスト：白水高広（株式会社うなぎの寝床代表取締役）

筑後地方に戻ってきた時に、地域の物産をまとまって見たり買ったりできる場所とか、つくり手の情報まで含めて伝えるような場所がなかったので、そういう機能の場所が各地域に1個とかあればいいなって。資源がいろんな人に伝わるので、そういうコンセプトモデルみたいな場所があればいいなと思ってやりはじめた感じですね。

第7回　12月8日

〈テーマ〉アーティストと地域をつなぐ

ゲスト：楠本智郎（つなぎ美術館学芸員）

最初は地域の方は足を運んでくださらなかったんですよね。私が企画したものを私が「面白いですよ」って言って声をかけたところで、やはりなかなか興味を持ってもらえない。であれば、アーティストと住民の方がまずゼロの状態から、一緒に立ち上げていけば、住民の方も自分のこととして興味を持って、ほかの人を誘って頂けるんじゃないかと思って、住民参画型アートプロジェクトを立ち上げたんです。

第8回
1月12日

〈テーマ〉生命体の音に耳を澄ます

ゲスト：藤枝守（SALプロジェクトメンバー）

もし自分がベートーヴェンみたいに今日はどうしようとか悩んだり、ショパンみたいに今日は誰かにこうしたからとかいって作曲しようとしたら、どこかで尽きると思うんですね。でも僕の場合は、自分がメディアというか、イタコみたいに自分の力で翻訳する。自分の想いとか自分の世界とかじゃなくて、大きな世界があって、そのなかで僕が伝えられることを音楽にしている感じなんです。

第9回
2月9日

〈テーマ〉感動体験型産業とは

ゲスト：平田大一（南島詩人・公益財団法人沖縄県文化振興会理事長）

小さな感動体験、本当に、本物の、本当に涙が出るぐらいの、心が震えるような体験っていうのが、すべてを変えていくと思うんですね。僕は「沖縄県文化観光スポーツ部は《感動産業》をやるんですよ」って、知事に当時言っていて。「なんだそれ」と言うから、《感動体験型産業》の略ですと。つまり文化もスポーツも、それから観光も、すべては感動体験なんですよね。

第10回
3月9日

〈テーマ〉想像力とつながり

ゲスト：知足美加子（SALコアメンバー）

修験道というと超能力みたいなイメージがありますけど、これは、目に見えない有機的なつながりに対する想像力というしかない。対象に自分を置き換えて、そこから見かえすくらいの強烈な想像力を獲得して世界観を広げることで、はじめてつながりが生まれていくと思うんです。今、「つながりをつくるためにアートが」ってよく言ったりしますけど、もう少し自己内面にぐっと入っていく作業があってはじめて、相手も自分を大事にしていることがわかっていくと思います。

DJ大田こぞうさんの声

Q カモシストに共通するものは何かありましたか？

カモシストのみなさんが見ているのは、多分私たちよりも少し先の方なんだろうな。取り組んでいることはそれぞれ違っていても、根っこの部分はみなさん同じだなと思いました。

みなさん「背骨」がしっかりしているので、どんな質問をしても揺らぐことなく、即答していただけました。簡単なようですが、ブレない人にしかできないことです。

Q 地域の発酵に必要なのは何だと思いますか？

一人ひとりが「生きていくこと」「生きること」に関心を持つことだと思います。

Q こぞうさんからみた「ソーシャルアート」ってどんなものでしょうか？

なんだかわからないけど、確かにそこに何かあると感じている人たちを「集めて」、同じ方向を見て「進んでいく」ための「共通言語」的な仕掛けかな。カモシストはその「通訳者」だと思います。

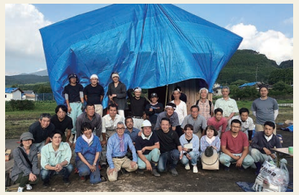
column 5

地域をひらくアートプロジェクト

知足 美加子（SALコアメンバー）

「熊本震災支援：板倉の家ちいさいおうちプロジェクト―森と暮らしをつなぐ復興住宅」

2016年4月、熊本震災の度重なる余震のなか、被災者は避難所生活や車中泊を強いられていた。このような状況をうけ、自宅敷地内に避難のための板倉小屋を建設する「ちいさいおうちプロジェクト」が企画された。杉材による板倉構法の避難家屋には3つの利点がある。ひとつは耐震構造に優れ、木の香りが被災者に癒しを与えること。次に安価で、自宅敷地内に建設可能であること。そして、阿蘇地区の森林資源（間伐材）の活用により復興につながることである。6月には、寄付された杉材と大工有志、ボランティアの協働により、熊本県西原村に「西原習合堂（しゅうごうどう）」（西原村商工会主催）を完成させた。また子供や学生たちが中心になって、損壊家屋の解体材・端材をいかした木製家具や小物づくりワークショップを行った。作品は被災者の方々に贈られている。力を合わせて「ものづくり」する姿そのものが、場と人を元気づけることを痛感した。7月に熊本市でシンポジウムを開催している。10月より西原村商工会青年部がステークホルダーとなって「板倉建築による復興住宅」の提案とその生産体制の整備を進めている。本プロジェクトの柱のひとつは「森林と人々の暮らしや文化をつなぎ、活性化する」ことにある。熊本の杉材を活用する復興住宅が、山と人々の意識をつなぎ直す契機となることを願う。メンバーは知足のほか、SALの田上健一、朝廣和夫、里山建築研究所、杉岡製材所、MMIX Labなどが中心となっている。



http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/ItakuraLitlleHouse.Project.html

「英彦山修験道美術再現プロジェクト」

本プロジェクトは、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）によって破壊された英彦山（ひこさん）修験道の文化財（福岡県田川郡）を、芸術的観点とデジタル技術を組み合わせて調査し、新たな信仰対象として再現する取り組みである。再現の対象は国指定文化財の《彦山三所権現御正体（ひこさんさんしょごんげんみしょうたい）》と《不動明王立像（ふどうみょうおうりゅうぞう）》（鎌倉時代）である。口伝を中心とした修験道文化は、明治期の禁止令によってほぼ途絶えている。また田川郡は炭鉱閉山にかかる人口減少の問題も抱えている。このような状況を踏まえ、本プロジェクトは英彦山神宮が願主となり、修験道文化の重要性を再考し、地域社会の矜持（きょうじ）に貢献することを目的としている。この取り組みは英彦山奉幣殿（ほうへいでん）再建400年記念事業の一環として位置づけられた。11月3日に、明治期より途絶えていた神仏習合の行事（神前読経と護摩焚き）が復活し、そのなかで再制作された信仰対象が祀られている。日本独自の文化である修験道は、古来の自然崇拝によるエコロジカルな視点と「習合（しゅうごう）」という共存共栄の精神性を内在しており、国際的にも注目に値する伝統文化である。本プロジェクトは、失われつつある地域の歴史文化を、アートと工学を組み合わせることで再興し、新しい価値を創造したプロジェクトである。知足が統括と彫刻を、SALの石上洋明が鋳造を担当し、佐々倉由美が協力している。

http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/hikosanpj2016.html

epilogue エピローグ

九州大学ソーシャルアートラボ×福岡市文化芸術振興財団

ソーシャルアート・フォーラム「アートの場をデザインする」

2017年3月4日（土）14:00〜17:00（開場13:30）
九州大学大橋キャンパス7号館1Fワークショップルーム

今年度の取り組みを振り返り、アートの場をデザインするのに必要なことについて広く議論するフォーラムを開催しました。人材育成、社会教育、アートとデザインの相違点などから検討し、現場で起こることを残しつなげるための方法を議論しました。

〈プログラム〉

第1部：事業報告と活動紹介

◎福岡市文化芸術振興財団
報告者：清原千香子、大澤寅雄

◎九州大学ソーシャルアートラボ
報告者：高坂葉月、藤枝守、ジェームズ・ジャック

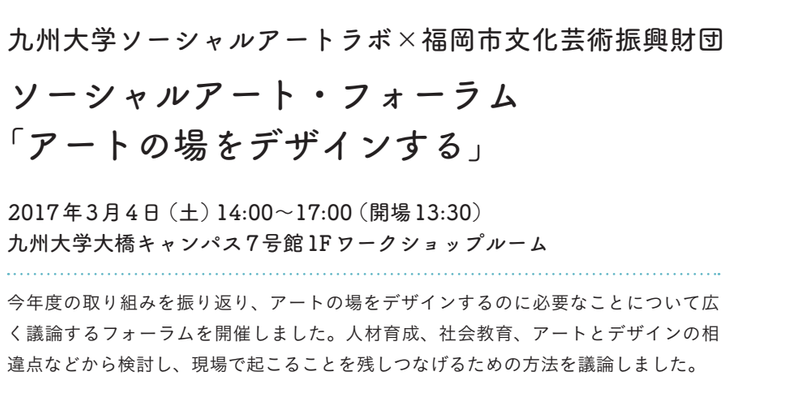
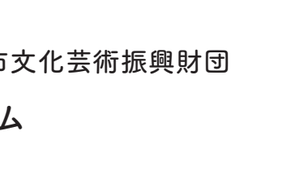
第2部：ディスカッション

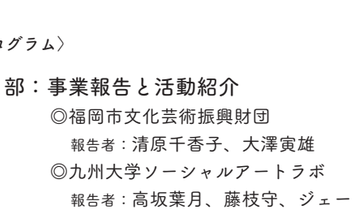
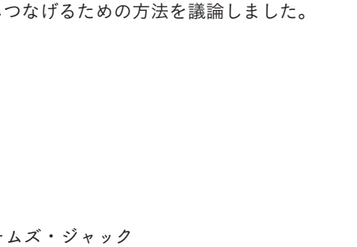
「アートの場をデザインする〜現場で起こることを残し、つなげる」

司会：中村美亜

登壇者：岡幸江（九州大学大学院人間環境学研究院准教授）
藤枝守
ジェームズ・ジャック
大澤寅雄

全体進行：長津結一郎

今年度のアートマネジメント人材育成ネットワークの広がり

（順不同）

epilogue エピローグ

この1年を振り返って

尾本 章（SALラボ長）

ソーシャルアートラボでは、今年度も文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」を中心に、さまざまな活動に取り組ませていただきました。特に八女のみなさまには、アートプロジェクト FUKUOKA × YAME REMIX を通して、バスツアー、八女の大名茶会などをはじめ、長期間にわたって本当にお世話になりました。「アートマネジメント人材ネットワークの構築」という枠を大きく押し広げながら、つながりの網の目が伸び続け、良い塩梅に「発酵」していることを実感しています。

若干アグレッシブ過ぎた工程管理で、事務局スタッフの体調管理が問題になったりで、深夜の病院の待合室で反省することもあった1年間でした。しかし、お世話になったみなさまから、「次はいつ、何が起こるのかね？ 本当に楽しみだね。」と笑顔で仰っていただいたことは、心の奥が少し暖かくなる、みんなの財産になっています。

我々の取り組みを、ラジオというメディアで取り上げていただいたことも大きな出来事でした。単なるイベントの広報ではなく、アートに関わるみなさんが創造的なアイディアを発酵させていく過程を月1回発信していただきました。力強い「カモシスト（醸すヒト）」が、ラボの周りに沢山おられることが再認識できました。

3ヶ年事業である「新しい交流の場を切りひらく創造的なアート実践を企画運営できる人材の育成事業―九州沖縄地域のアートマネジメント人材育成ネットワークの構築」は、最終年度を迎えます。これまで取り組んできたことを、どのように継続させ、更に美味しく発酵させるか、これまで以上に真摯に取り組んでいきたいと思っています。また、ラボがやってきた成果をどのように公平に評価できるのか、大学にいる者として、真剣に考えてみたいとも思っています。

今年度お世話になったみなさまに、心からの御礼を申し上げます。ありがとうございました。また来年度以降も引き続きご指導頂き、ご支援頂きますよう、お願い申し上げます。

メディア掲載一覧

2016. 9. 15
福岡市政だより
» アートプロジェクト FUKUOKA × YAME REMIX「里山を編む〜天神・奥八女バスの旅」

2016. 9. 24
毎日新聞（朝刊）
» アートバスツアー「里山を編む〜天神・奥八女バスの旅」

2016. 10. 12
西日本新聞（朝刊）
» 九州大学ソーシャルアートラボ「里山を編む〜天神・奥八女バスの旅」

2016. 10. 25
朝日新聞（朝刊）
»「里山×アート　地域再発見」

2017. 1. 20
読売新聞（朝刊）
» アートプロジェクトFUKUOKA × YAME REMIX

2017. 2. 1
福岡市政だより
» アートプロジェクト FUKUOKA × YAME REMIX「八女の大名茶会」

2017. 2. 1
artscape（トピックス）
» アートから生まれる社会：九州大学ソーシャルアートラボ「FUKUOKA × YAME REMIX」を探る

2017. 2. 2
朝日新聞（朝刊）
» アートプロジェクト FUKUOKA × YAME REMIX「八女の大名茶会」

2017. 2. 3
西日本新聞（朝刊）
» アートプロジェクト FUKUOKA × YAME REMIX「八女の魅力をアートで」

2017. 2. 9
西日本新聞（朝刊）
» アートプロジェクト FUKUOKA × YAME REMIX「音楽や語り通じ八女茶味わおう」

2017. 3. 1
artscape（フォーカス）
» セレンディピティが解く地域社会の課題――ソーシャルアートの人材育成

九州大学ソーシャルアートラボ

コアメンバー
［ラボ長］尾本 章（コミュニケーションデザイン科学部門 教授、応用音響工学）
［副ラボ長］中村 美亜（コミュニケーションデザイン科学部門 准教授、芸術社会学）
知足 美加子（コンテンツ・クリエーティブデザイン部門 准教授、彫刻）
朝廣 和夫（環境デザイン部門 准教授、緑地保全学）
長津 結一郎（コミュニケーションデザイン科学部門 助教、アートマネジメント）
［事務局長］高坂 葉月（学術研究員）

プロジェクトメンバー
藤枝 守（コミュニケーションデザイン科学部門 教授、作曲）
池田 美奈子（デザインストラテジー部門 准教授、情報デザイン）
James Jack（日本学術振興会外国人特別研究員）
猪股 春香（春々堂）

アドバイザー
大澤 寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室准主任研究員）
伊藤 寛（大学院芸術工学府 非常勤講師）

事務局スタッフ
佐々倉 由美（テクニカルスタッフ）
石上 洋明（テクニカルスタッフ）

事業助成
平成28年度文化庁　大学を活用した文化芸術推進事業

事業共催
公益財団法人福岡市文化芸術振興財団

事業後援
日本アートマネジメント学会九州部会

アートが生まれる場所、アートが紡ぐ時間　2
九州大学ソーシャルアートラボ 平成28年度 活動報告書

2017年3月31日発行

編　集　中村 美亜、高坂 葉月
写　真　A.T.＝富永 亜紀子、S.N.＝長野 聡史、
　　クレジットなし＝九州大学ソーシャルアートラボ
デザイン　大村 政之（couleur）
発　行　九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ
　　〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原4-9-1
　　九州大学大橋キャンパス多次元デザイン実験棟 ソーシャルアートラボ事務局
　　TEL&FAX: 092-553-4552
　　E-MAIL: sal@design.kyushu-u.ac.jp　URL: http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/

©2017 九州大学ソーシャルアートラボ

SOCIAL ART LAB

FACULTY OF DESIGN
KYUSHU UNIVERSITY

九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

九州大学

大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

Faculty of Design
Graduate School of Design
School of Design
Kyushu University

文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

photo: S.N.